

中国におけるブドウの生産・流通・消費 調査報告書

2012年10月

公益財団法人 中央果実協会
[JAPAN FRUIT ASSOCIATION]

は し が き

輸入自由化等の進展により、外国産果実およびその加工品等が我が国果樹産業に大きな影響を与えています。このような我が国の果樹産業を取り巻く環境の変化に対応して、当協会では関係機関・団体等からの海外果樹関係の情報ニーズを踏まえ、海外における果実およびその加工品等の生産・流通事情等に関する情報の収集・提供を行うことにより、我が国果樹産業の活性化・振興、果実の需給・価格の安定のほか輸出の振興にも資することとしております。

中国においては経済成長と一定の富裕層の形成を背景に、日本産果実に対する需要増加が見込まれておりますが、現在輸入が解禁されている品目はリンゴとナシのみとなっております。これに対し、我が国政府は、中国政府に対しブドウの輸入解禁を要請しており、解禁を見据えた輸出戦略の構築が求められています。

しかしながら、中国におけるブドウの生産・流通・消費の現状については体系的な調査は実施されておらず、不明瞭な点が多いことから、中国におけるブドウの生産・流通・消費の実態解明を行うこととし、もって、我が国の果樹農業の活性化及び輸出振興に資することとしました。

この調査は、弘前大学農学生命科学部附属リンゴ振興研究センターに委託して行ったものであり、本調査に御尽力いただきました方々に、深く感謝申し上げます。

本調査結果が、様々な場面で活用され、今後我が国果樹産業の国際化対策の推進等において少しでもお役に立てれば幸いです。

2012年10月

公益財団法人 中央果実協会
理事長 吉 國 隆

無断転載を禁じます

本書の内容等について、ご質問やお気づきの点がありましたら、下記あてにご連絡下さるようお願いいたします。

公益財団法人 中央果実協会 情報部

〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル内

【電 話】03-3586-1381

【FAX】03-5570-1852

目 次

第1章 世界の中の中国ブドウ産業	1
第1節 世界のブドウ生産における中国の地位	1
第2節 世界のワイン生産における中国の地位	4
第3節 世界のブドウ・ワイン貿易における中国の地位	5
第4節 小括～世界における中国ブドウ産業の地位～	7
第2章 中国におけるブドウ政策と生産地域	9
第1節 中国におけるブドウ生産地域	9
1) 中国におけるブドウ生産適地	
2) 中国における地方レベルのブドウ政策～山東省の事例～	
第2節 中国におけるブドウ生産品種	11
第3節 中国におけるブドウ加工品生産の概況	14
1) ワイン	
2) ブドウジュース	
3) 干しブドウ	
第3章 中国ブドウ農業の事例調査	15
第1節 調査地域の概況	15
1) 山東省青島市平度市大澤山鎮の概況	
2) 山東省煙台市蓬萊市の概況	
第2節 生食用ブドウ生産の実態～山東省青島市平度市大澤山鎮上甲村の事例～	16
1) 上甲村の概況	
2) 上甲村におけるブドウ品種構成と収益性	
3) ブドウの産地流通と出荷先	
4) 大澤山鎮におけるブドウ祭り	
第3節 ワイン製造企業によるブドウ原料基地の実態～山東省煙台市蓬萊市の事例～	20
1) 調査対象企業・J社の設立の経緯	
2) 原料基地におけるブドウ生産状況	
3) ブドウ生産におけるJ社の役割	
4) ワインの販売状況	
第4章 中国大消費地におけるブドウ販売状況	23
第1節 中国における北京・上海・広州の経済的位置	23
第2節 北京・広州におけるブドウの卸売状況	26
1) 北京市豊大新発地農副産品批発市場の概要	
2) 広州江南果菜批発市場の概要	
3) 北京市、広州市の卸売市場におけるブドウの販売状況	
第3節 北京・上海・広州におけるブドウの小売状況	29

中国におけるブドウの生産・流通・消費調査関連写真

第4節 広州消費者のブドウ購買状況 32

 1) 広州消費者の普段のブドウの購買行動と中国産ブドウへの評価

 2) 広州消費者の外国産ブドウの購買行動と外国産ブドウへの評価

第5章 37

 第1節 要約 37

 第2節 考察 38

参考文献一覧 39

〈参考資料〉アンケート調査票 40



図3-1 「調査地域の位置」
青島市平度市大澤山鎮 (本文15頁)
出典：Google Earth。



写真3-1 大澤山鎮「中国ブドウの郷」モニュメント
(本文15頁)

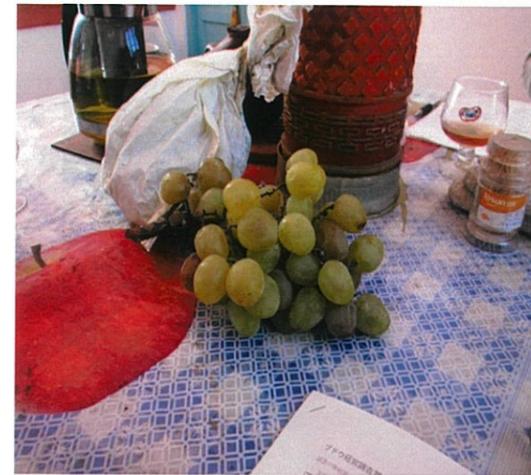


写真3-2 「澤山1号」
・査先農家で撮影。収穫期が10月末までで調査時期は12月下旬であり、少なくとも2ヶ月間保存されていたもの。穂軸の部分に鮮度の低下が見て取れる。農家によれば冷蔵庫で管理すればより高い鮮度で保存できるとのこと。(本文17頁)

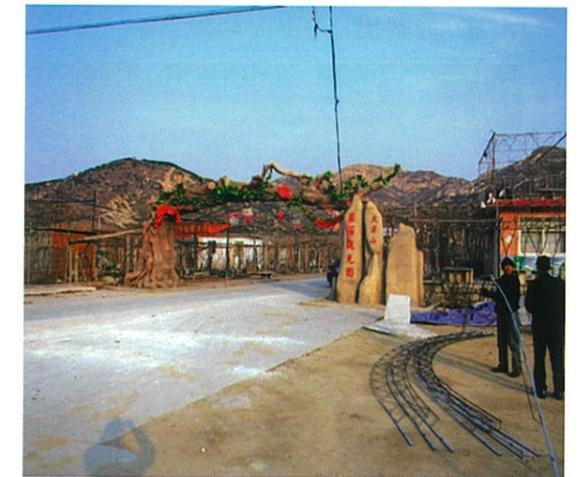


写真3-3 「ブドウ祭りの会場」
・門柱に「大澤山葡萄観光園」(本文19頁)



写真 3-4 「一面のワイン農園」

・ホテルとワイン製造工場（奥の建物）が設置。
敷地内にゴルフ場もある。（本文 20 頁）



写真 4-1 「自由市場で販売されているブドウ」

・露地で山積み販売。手前の「青堤」は穂軸が太く緑色だが、奥の「赤堤」の穂軸はやせ細り褐変。（本文 32 頁）



写真 4-2 自由市場にて、ブドウの房にハサミを入れる様子

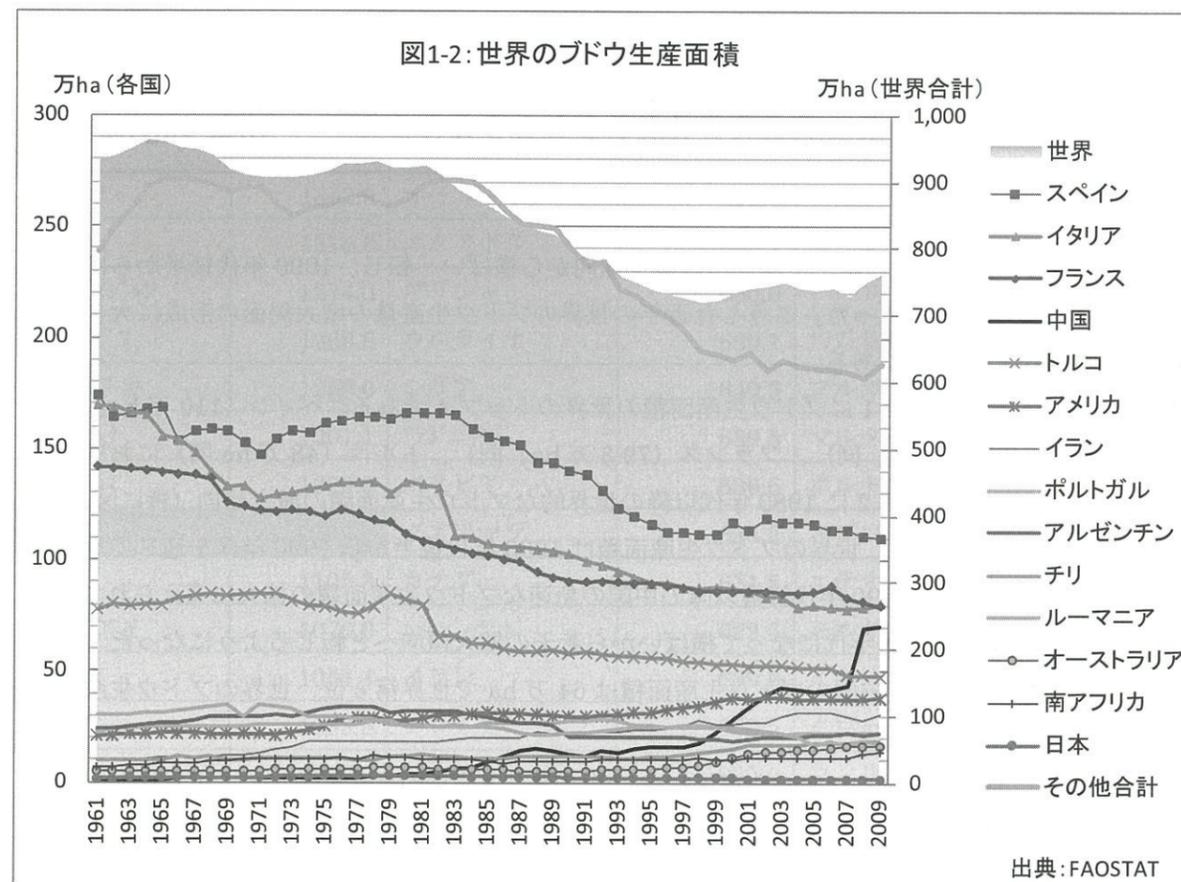
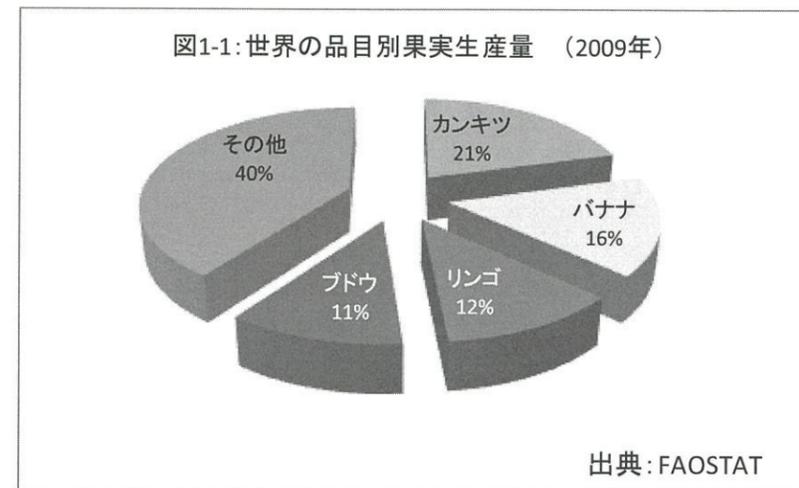
鮮度の低下したブドウの粒を取り除き、プラスチック製のザル（右手水色）に移している。（本文 32 頁）

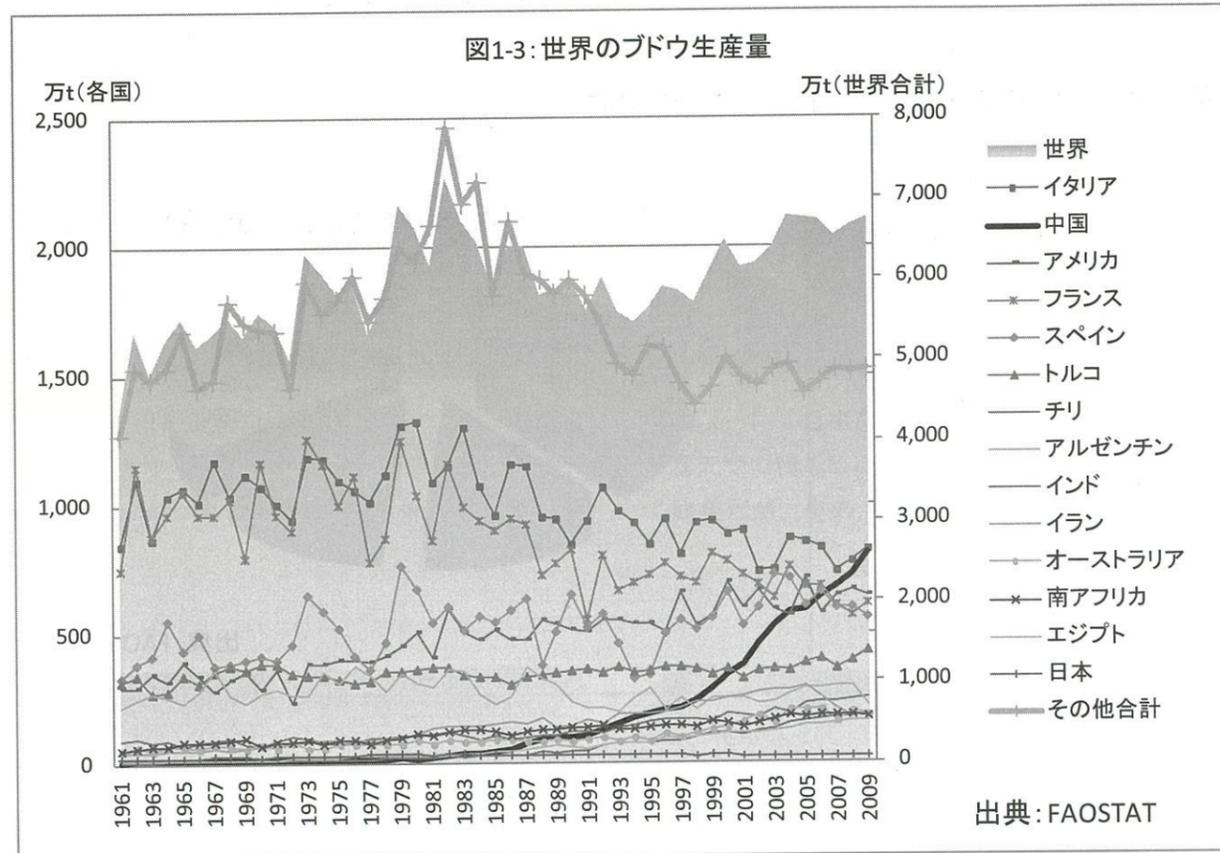
第 1 章 世界の中の中国ブドウ産業

第 1 節 世界のブドウ生産における中国の地位

ブドウは、カンキツ（1 億 2,283 万 t）、バナナ（9,581 万 t）、リンゴ（7,051 万 t）に次ぐ生産量（6,790 万 t）を誇る、世界の主要な果実の一つである（図 1-1）。

その世界全体での生産面積は 1980 年代以降減少傾向にあり、並行して生産量も減少傾向にあった（図 1-2・1-3）。





しかしながら、1990年代以降、生産面積は減少傾向から横ばいへ転じ、1990年代後半からは生産量において再び増大局面へ入った。こうした近年の世界のブドウ生産量の増大局面の形成に大きな役割を果たしているのが中国である。

世界的な趨勢の特徴は、第1にブドウ生産面積の世界のトップ4であるスペイン(110万ha、2009年)、イタリア(80.2万ha、同)、フランス(79.3万ha、同)、トルコ(48万ha同)における生産面積の長期的減少傾向、第2に1980年代以降の世界的なブドウ生産面積の減少傾向(特に図1-2の「その他合計」)を背景に、世界のブドウ生産面積は1980年代後半から1990年代を通じて大きく減少した。しかしながら、1990年代終盤以降の中国の急速なブドウ生産面積の拡大に支えられて、世界のブドウ生産面積は2000年代になって横ばいから若干の拡大傾向へと転じるようになった。最新のFAOのデータによれば、中国のブドウ生産面積は64万haで世界第4位、世界のブドウ生産面積720万haの9%を占めている。

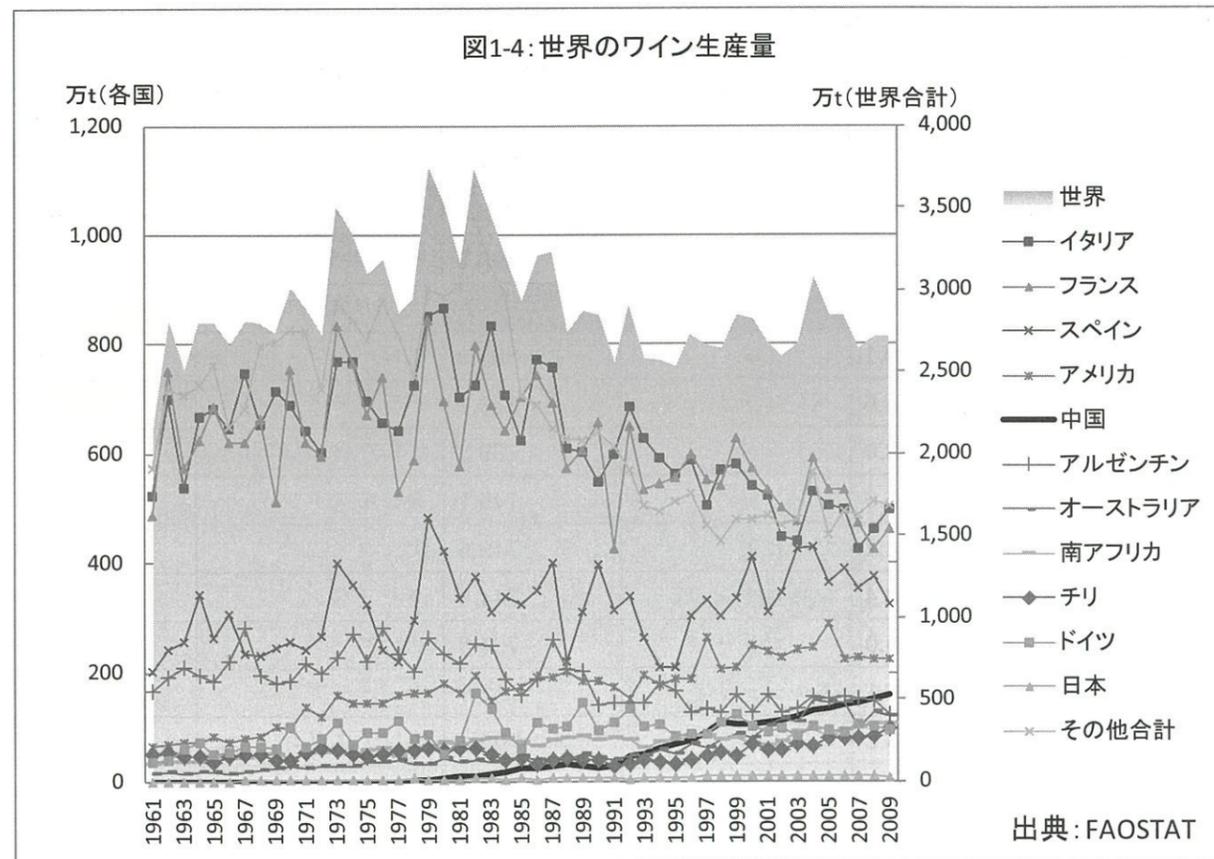
図1-3には、世界の主要なブドウ生産国におけるブドウ生産量の推移を示した。世界最大の生産国であるイタリア(824万t、2009年)やフランス(610万t、同)の長期的な減少傾向とは対照的に、中国の生産量の伸びが80年代後半以降、特に90年代後半以降になって著しく大きいことがわかる。

結果として中国のブドウ生産量は2009年の段階では生産量でイタリアに次ぐ第2位(824万t)、

表1-1:世界のブドウ単収(2009年)単位:kg/10a

国名	単収	国名	単収	国名	単収
エジプト	2384.6	イエメン	959.3	ホンジュラス	516.7
インド	2347.5	スイス	951.4	タンザニア	514.7
イラク	2139.9	キューバ	908.1	スペイン	506.7
アルバニア	1908.1	トルコ	890.3	モルドバ	503.7
韓国	1789.5	世界平均	889.1	マダガスカル	452.8
ベトナム	1770.1	レバノン	888.9	スロバキア	451.1
タイ	1738.6	パレスチナ	850.9	パラグアイ	447.2
サウジアラビア	1728.0	フランス	769.3	ボスニアヘルツェゴヴィナ	441.7
ペルー	1695.6	ウズベキスタン	749.7	タジキスタン	440.9
アメリカ	1684.2	セルビア	749.6	チェコ	427.2
ブラジル	1678.4	レユニオン	744.8	パキスタン	422.7
ベネズエラ	1600.0	ハンガリー	724.3	リビア	419.3
コロンビア	1578.1	アルジェリア	712.7	チュニジア	397.1
イスラエル	1546.2	ロシア	709.6	モンテネグロ	395.2
アルメニア	1459.9	ジンバブエ	702.7	カタール	370.0
ドイツ	1454.5	スロベニア	701.6	ナミビア	356.9
トルクメスタン	1352.9	オーストリア	695.3	グルジア	312.7
チリ	1315.8	エクアドル	685.7	オランダ	283.3
アゼルバイジャン	1274.0	ギリシャ	680.0	バーレーン	283.1
ユーゴスラビア	1269.8	ウクライナ	660.1	アフガニスタン	280.0
南アフリカ	1250.0	シリア	640.9	ブルガリア	277.3
ルクセンブルク	1207.1	アフガニスタン	639.5	マルタ	267.8
メキシコ	1200.0	ボリビア	636.6	ポルトガル	219.0
中国	1137.9	グアテマラ	634.2	キプロス	216.7
日本	1105.3	カナダ	631.5	エチオピア	207.1
ウルグアイ	1076.6	ニュージーランド	629.5	キルギスタン	201.6
オーストラリア	1054.4	イラン	609.9	イギリス	151.5
ヨルダン	1033.8	クロアチア	600.5	クウェート	130.0
イタリア	1027.9	モロッコ	600.0	フィリピン	51.7
ベルギー	1000.0	カザフスタン	586.3		
アルゼンチン	981.2	ルーマニア	538.7		

出典: FAOSTAT



2010年にはイタリア（779万t）を抜いて第1位の865万t、世界のブドウ生産量6,831万tのうちの12.7%を占めるまでになっている。

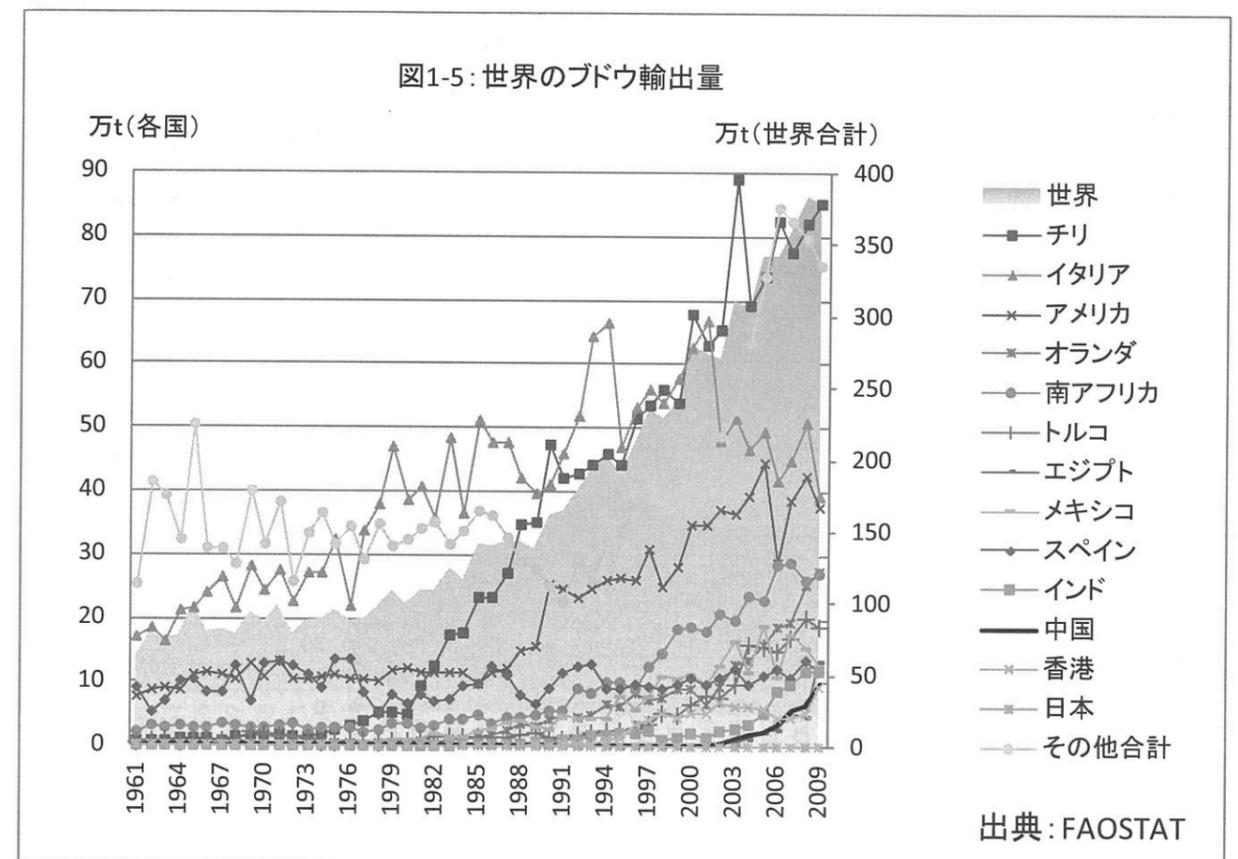
このような中国におけるブドウ生産量の増大は、生産面積の拡大と共に、単収の増大によっても支えられている（表1-1）。中国のブドウ単収は、1961年から1986年までの間、400~700kg/ha前後で推移してきたが、1980年代後半以降大きく伸び、2009年には1,138kg/haとなっている。

第2節 世界のワイン生産における中国の地位

世界のブドウ生産量の趨勢と同様のことは、世界のワイン生産の状況についてもいうことができる（図1-4）。

ワインの生産量は、世界的には1980年代に減少傾向を示していた。その傾向は、今日に至るまで、特にワインの最大生産国であるイタリア（499万t、2009年）、フランス（463万t、同）を始め多くの国々で見られている。その中でも1990年代に入って世界のワインの生産量が横ばいから若干の増大傾向へと転換したのは、中国を始め、アメリカ、チリ、南アフリカ、オーストラリア等の国々による増産であった。

2009年の中国のワイン生産量は、158万tで世界第5位、世界のワイン生産量2,722万tの5.8%



を占めている。

第3節 世界のブドウ・ワイン貿易における中国の地位

世界のブドウ貿易の趨勢は、ブドウやワインの生産量の趨勢とは異なって、年を追うごとに活発化してきている。

輸出においては、歴史的にはイタリア（39万t、2009年）が最も活発であったが、80年代以降はチリが輸出量を急速に伸ばし現在世界第1位（85万t、同）の突出した輸出国となっている（図1-5）。その他主要輸出国としては、アメリカ（36万t、同）、オランダ（27万t、同）、南アフリカ（27万t、同）、トルコ（19万t、同）などがある。中国も、2000年代に入って輸出量を目立って伸ばしてきており、2009年では10万tで世界第10位、世界のブドウ輸出量380万tの2.6%を占めている。

一方の輸入については、ドイツ（31万t、2009年）が一貫して活発であるが、1980年代以降はアメリカ（53万t、同）が大きく伸びてきており、1990年代以降は、ロシア（38万トン、同）の他、オランダ（38万トン、同）、イギリス（24万トン、同）、ポーランド（11万t、同）等欧州各国に加え、中国、香港（13万t、同）の輸入量が目立って大きくなってきている（図1-6）。

図1-6: 世界のブドウ輸入量

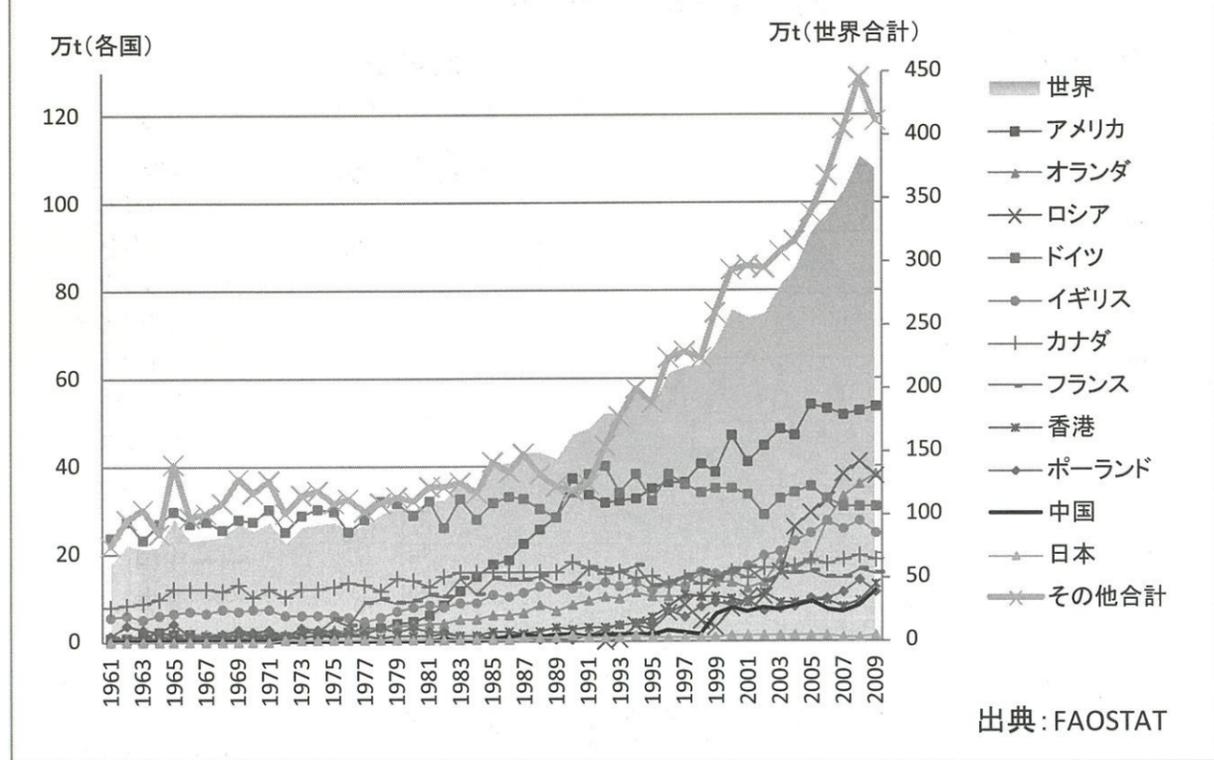


図1-8: 世界のワイン輸入量

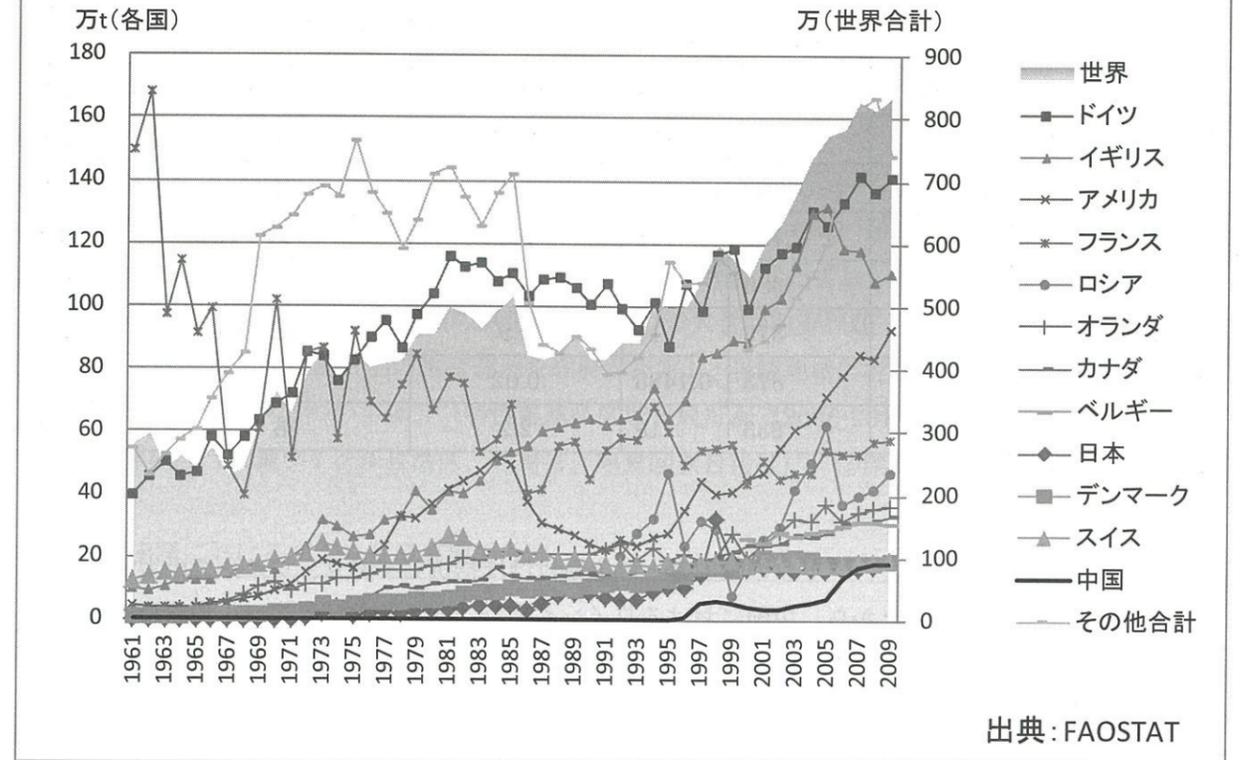
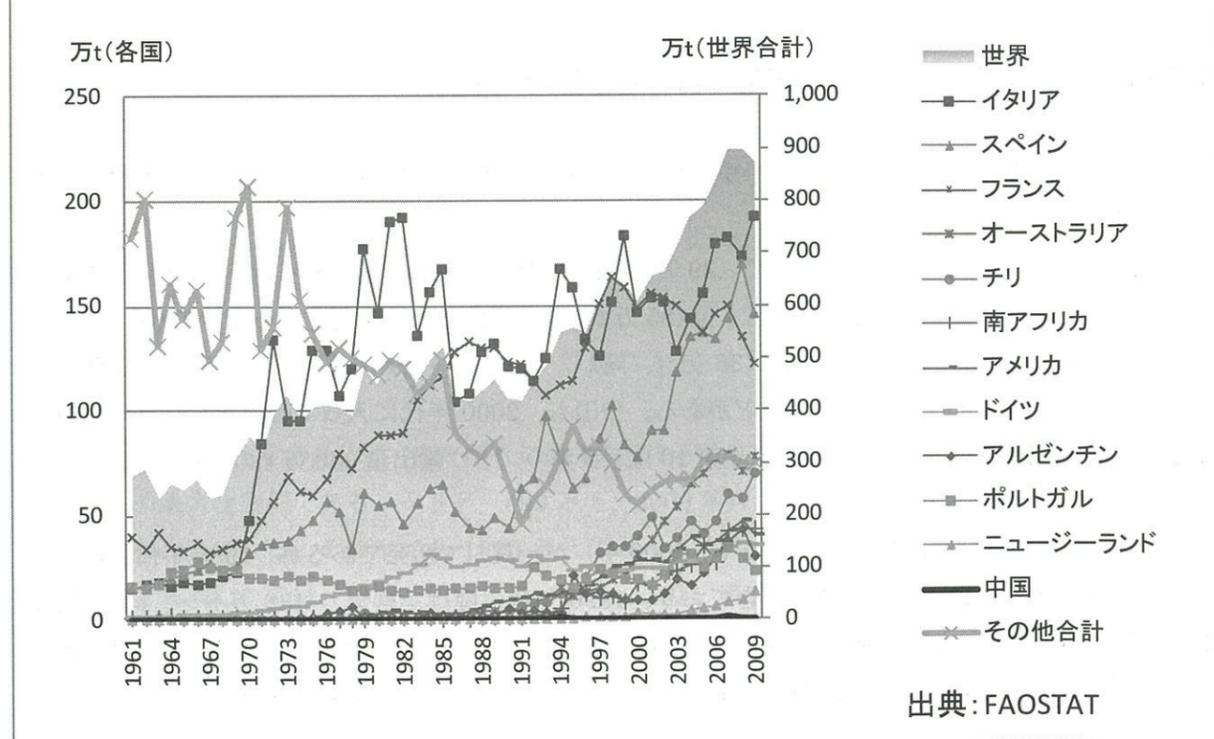


図1-7: 世界のワイン輸出量



2009年の中国のブドウ輸入量は11万tで世界第10位、世界のブドウ輸入量373万tの3%を占めている。

次にワイン貿易については、1990年代以降活発になってきている。世界の主要なワイン輸出国は、イタリア（191万t、2009年）、スペイン（146万t、同）、フランス（122万t、同）等となっている。それに対して中国は、この10年間で1,000～9,000t台で推移しており、直近の2009年では1,483tで、世界のワイン輸出873万4,609tの0.02%を占めている。

一方のワイン輸入量においては、主要な輸入国としてドイツ（141万t）、イギリス（110万t）、アメリカ（93万t）等の先進国、一定の所得水準にある国々で占められている。それに対して中国の輸入量は、1990年代後半から増加しつつあり、直近の2009年では18万tで世界第12位、世界のワイン輸入量833万tの2.2%を占め、主要な輸入国の一つとなっている。

第4節 小括～世界における中国ブドウ産業の地位～

ここまでの世界と中国のブドウ及びワインの生産と貿易状況についてまとめることとしよう（表1-2）。中国においては、改革開放以降の商業的農業の展開の中でブドウ農業は著しい発展を遂げている。今や中国は、生産量で世界第1位、生産面積で世界第4位と、世界でも有数のブドウ生産国となった。また、ワインの生産においても世界第5位と、有数のワイン生産国となっている。

第2章 中国ブドウ農業の概況

表 1-2：世界における中国ブドウ産業の地位

	単位	世界 (A)	中国 (B)	% (B/A×100)	世界における中国の順位	年
生産面積	万 ha	720	64	8.9%	第 4 位	2010
生産量 (ブドウ)	万トン	6,831	865	12.7	第 1 位	2010
単収	kg/10a	889	1,138	—	第 24 位	2009
生産量 (ワイン)	万 t	2,722	158	5.8	第 5 位	2009
輸出量 (ブドウ)	万 t	380	10	2.6	第 10 位	2009
輸入量 (ブドウ)	万 t	373	11	2.9	第 10 位	2009
輸出量 (ワイン)	万 t	873	0.1483	0.02	第 56 位	2009
輸入量 (ワイン)	万 t	833	18	2.2	第 12 位	2009

出典：FAOSTAT

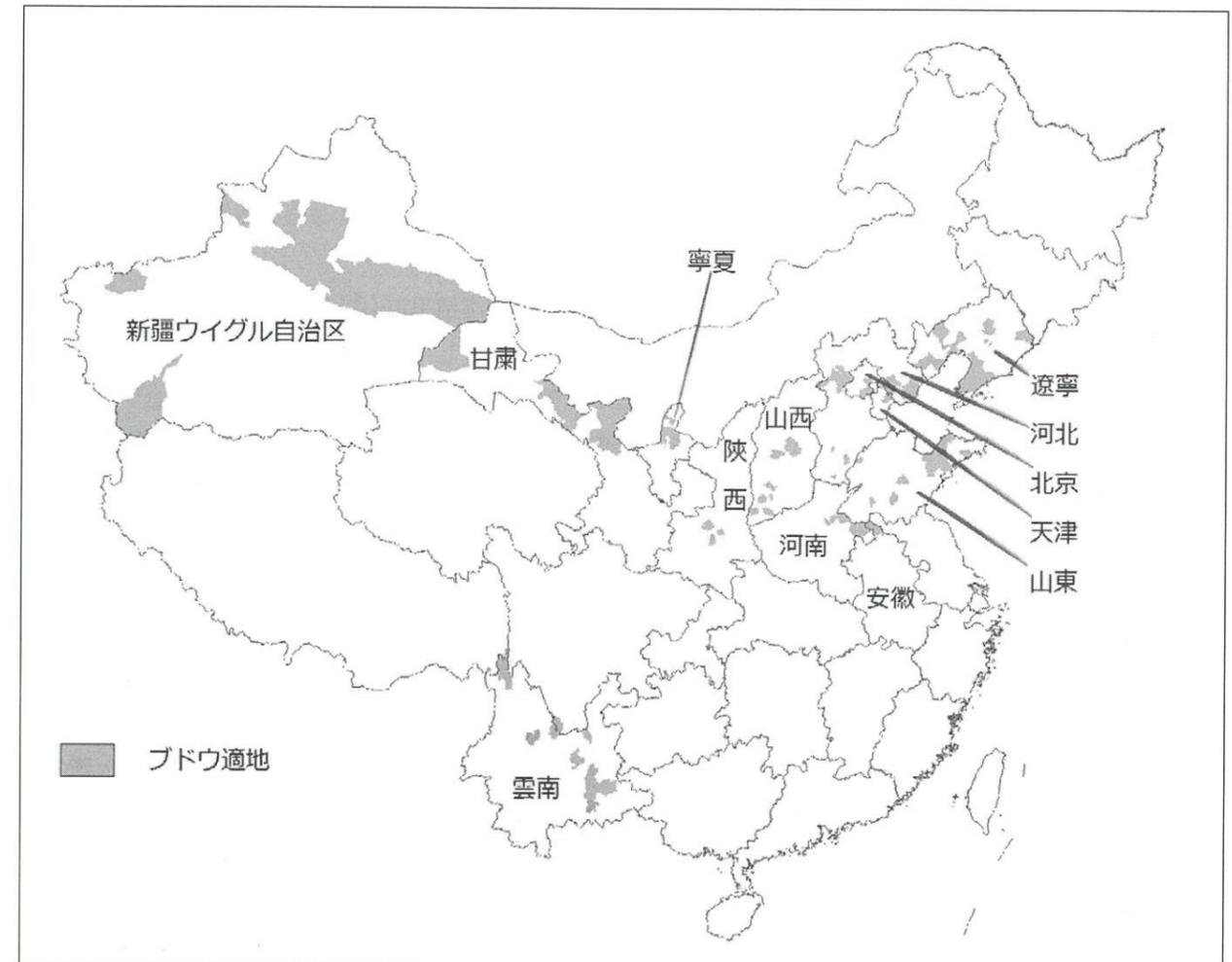
一方、貿易の状況を見ると、ブドウの輸出量と輸入量はほぼ拮抗しており、ワインでは大幅な入超となっている。こうしたことから、中国におけるワインも含むブドウの需給状況は、現状は需要超過状態といえることができる。このことは、中国のブドウ及びワイン生産量が急激に伸びつつあることとも対応する事実といえることができるだろう。

第1節 中国におけるブドウ政策と生産地域

1) 中国におけるブドウ生産適地

改革開放以降、生産責任制の導入と、段階的な流通統制の撤廃を受けて、中国農民は自由に作付け品目を選択することができるようになった。このことから、収益性の高い品目への転換が各地で進み、果実の生産量は飛躍的に増大した。しかしながら、急速な増産は必ずしも計画的に進められてきたわけではなかったため、政府は果樹農業の構造調整を一つの大きな政策課題として位置づけるに至った。そこで、2003年から順次品目別の生産適地を政府が指定し、当該地域に対して重点的に支援策を講じることとした。ブドウについては、「特色農産品区域布局計画(2006-2015年)」(農業部)において、①新甘寧区(新疆ウイグル自治区、甘粛省、寧夏回族自治区)、②環渤海湾(遼寧省、河北省、

図 2-1：中国におけるブドウ生産適地の位置



出典：特色農産品区域布局計画(2006-2015年)

省等	地名
新疆	鄯善、吐魯番、托克逊、哈密、霍城、伊宁、昌吉、玛纳斯、呼图壁、沙湾、乌苏、石河子、焉耆、和硕、和静、和田、阿图什
甘肃	古浪、民乐、山丹、敦煌市、高台、凉州区、民勤、临泽、甘州区
宁夏	灵武、永宁、贺兰、青铜峡
遼寧	北镇、盖州、于洪区、凌海、大石桥、绥中、建昌、兴城、北票、营口、辽阳、桓仁、瓦房店、普兰店、庄河、长海
河北	昌黎、卢龙、抚宁、宣化区、宣化、怀来、涿鹿、遵化、乐亭、滦县、丰润、阳原、柏乡、威县、滦南、玉田、成安
北京	通州、顺义、大兴、
天津	蓟县、汉沽、宁河
山東	平度、莱西、即墨、蓬莱、龙口、招远、昌邑、高密、莱州、沂源、夏津、任城区、乳山、平邑
陝西	乾县、礼泉、灞桥、户县
山西	清徐、榆次、汾阳、太谷、稷山、新绛、夏县、临猗、文水、太原市尖草坪区、曲沃、尧都区
河南	民权、兰考、开封、虞城、夏邑、商丘
安徽	萧县、砀山、界首
雲南	姚安、永仁、元谋、禄丰、蒙自、弥勒、丘北、宾川
吉林	集安、柳河、通化、东昌、梅河口、辉南、梨树、公主岭、德惠（ただし山ブドウ）

資料：中国農業部「特色農産物地域配置計画（配置図）」

北京市、天津市、山東省）、③黄河故道（黄河の旧河道）、④汾渭平原（甘肅省、寧夏回族自治区、陝西省、山西省）、⑤雲南高原（雲南省）の5地域が生産適地として指定された（図 2-1 及び表 2-1）。

このように、中国のブドウ産地は、多くの省に分布しているが、伝統的産地といえば、遼寧省、河北省、山東省とされている。それが、雨よけ技術の普及と共に、南部の雨量の多い地域でも生産可能になり、新興産地拡大へとつながった¹。主な産地は新疆ウイグル自治区 193 万t、河北省 105 万t、

¹ 中国におけるブドウ産地拡大の経緯については、晁 [2] 参照。それによると、1974 年に黒龍江省でブドウの施設栽培に成功し、収穫期の調節が可能となった。1990 年代にはハルピン（黒竜江省）でレッドグローブの施設栽培による収穫期延長、2003 年、甘肅省で低温乾燥地域におけるレッドグローブの施設栽培による収穫期延長にそれぞれ成功したことから、新疆ウイグル自治区、青海省、甘肅省等の西部の標高が高く寒冷な地域でのブドウ生産が拡大した。南方では、1980 年代に浙江省で、1990 年に上海でそれぞれブドウの雨よけ施設栽培に成功して以降、ブドウ産地が急速に拡大した。江蘇省、上海市、福建省、湖南省、湖北省、広東省、雲南省等では大規模なブドウ雨よけ生産に、広西チワン族自治区では二期作に取り組んでいる。

山東省 94 万t、遼寧省 64 万t、河南省 46 万t等となっている²。

また、伝統産地は比較的大規模で粗放的な経営、新興産地では比較的労働集約的な経営が見られる傾向がある³。

2) 中国における地方レベルのブドウ政策～山東省の事例～

中国政府は、改革開放以降の農業の発展の中で、必ずしも計画的に進められなかったことによって現れてきた構造的な問題へ対応するため、2003 年 1 月「優勢農産品区域布局計画」（農業部）を策定し、果樹についてはまずリンゴとカンキツの生産適地を指定して優先的に政策的支援を与えるとした上で、「リンゴ優勢区域発展計画」及び「カンキツ優勢区域発展計画」を策定し、現状分析と課題を抽出し、目標を定めている⁴。このことに呼応するように、中国を代表する果実産地である山東省では、「山東省優勢農産品区域布局計画（2004-2009）」が策定され、同省が中国で最大の生産量を誇っているリンゴについて、省内 31 県を適地に指定し、単収、生産量、輸出量に関する数値目標と、品質の向上を掲げている⁵。このように中国では、中央政府の政策の策定に呼応して、地方政府がその地域的な特性にあわせて個別に類似の政策を策定している。

ブドウに関しては、まず中央政府が上述の「特色農産品区域布局計画（2006-2015 年）」（農業部）において、生産適地を定めている。さらに山東省においては、2010 年に「山東省特色農産品区域布局計画（2006-2010）」が策定され、省内のブドウ農業振興の方針が打ち出されている。特に、後述する青島市平度市大澤山鎮、あるいはそこを中心として広がる産地のブドウを「大澤山ブドウ」として取り上げて、当地における生食用ブドウ生産量 30 万トン、加工用ブドウ 30 万トン、ワイン生産量 25 万トンを数値目標として掲げている。

第 2 節 中国におけるブドウ生産品種

中国で生産されている品種は、20 世紀中期には玫瑰⁶香（マスカットハンブルグ）⁷、龍眼、牛乳が主力品種であったが、1980 年代に日本から巨峰が、1990 年代にアメリカから紅地球（レッドグロー

² いずれも 2009 年の値。中国統計年鑑参照。

³ 中国農業大学での聞き取りによる。

⁴ 「優勢農産品区域布局計画」は、その他にも小麦、トウモロコシ、大豆、綿花、油菜、甘薯、食肉（牛肉・羊肉）、牛乳、水産物について適地を指定している。成田 [9] 参照。

⁵ 「山東省優勢農産品区域布局計画（2004-2009）」は、その他にも小麦、トウモロコシ、綿花、落花生、リンゴ、野菜、肉牛羊牛、家禽、豚、乳用牛、水産品について、同様の目標を掲げている。

⁶ 「玫瑰」は「meigui（メイグイ）」と発音し、花の「バラ」の意。

⁷ 以下、品種名については「中国名（日本名）」のように表記する。当該箇所では、「玫瑰香」が中国名、「マスカットハンブルグ」が日本名である。また、中国で選抜された品種で日本名がないものについては、判明しているものに限っては親品種を（ ）内に記載する。親品種も不明なもの、或いは日本名が確認できなかったものについては、中国名のみ表記する。

表 2-2：中国の主要なブドウ生産品種

品種名	維多利亞 (ビクトリア)	夏黒 (サマーブラック)
果皮の色	緑黄色	紫黒色・藍黒色
早・中・晩生の別	早生	早生
開花期	5月中上旬	5月中旬
収穫期	7月中旬 (鄭州市)	7月中旬 (鄭州市)
果房平均重量	630g	670g
果房最大重量	—	—
果粒平均重量	9.5g	9.4g
果粒最大重量	15g	12g
糖度	16度	17.3度
食味・食感	果肉は硬くてもろい 果皮は中程度の厚さ	果粉が多い 果肉は崩壊性
その他特徴	裂果・落粒なく 貯蔵性・輸送性に優れる	種無
品種名	京亜	粉紅亜都蜜 (ヤトミローザ)
果皮の色	紫黒色或いは藍黒色	紫紅色
早・中・晩生の別	早生	早生
開花期	5月中旬	4月上旬
収穫期	7月中旬 (鄭州市)	7月下旬 (鄭州市)
果房平均重量	470g	750g
果房最大重量	892g	1,000g 以上
果粒平均重量	9g	9.5g
果粒最大重量	12.6g	14g
糖度	13.5~15.5度	18%
食味・食感	果皮は中程度の厚さ 果肉硬度は比較的柔らかい 甘く多汁でイチゴのような香り	バラの香り 果肉中間
その他特徴	—	—

ブ) が導入されるなど品種の多様化が進み、黒奥林 (ブラックオリンピア)、藤稔、戸太 8 号 (オリンピアの変芽)、京亜 (中国農業科学院におけるブラックオリンピア実生種から選抜)、粉紅亜都蜜 (ヤトミローザ)、維多利亞 (ビクトリア)、夏黒 (サマーブラック) 等が主として生産されており、赤ないし黒ブドウが主となっている (表 2-2)。

表 2-2：中国の主要なブドウ生産品種 (続き)

品種名	藤稔	巨峰
果皮の色	紫紅色或いは紫黒色	紫黒色
早・中・晩生	中生	中生
開花期	5月下旬	5月中下旬
収穫期	8月中旬 (鄭州市)	8月中下旬 (鄭州市)
果房平均重量	400g	400g
果房最大重量	892g	1,500g
果粒平均重量	12g	8.3g
果粒最大重量	—	—
糖度	約 15%	16度以上
食味・食感	果皮は中程度の厚さ 果肉は柔らかい	果粉が多い 果皮は比較的厚く弾力あり、渋みあり 果汁多く甘酸適和、イチゴのような香り
品種名	戸太 8 号 (オリンピアの変芽)	紅地球 (レッドグローブ)
果皮の色	紫紅色	紅色
早・中・晩生	中生	晩生
開花期	5月中下旬	4月中旬
収穫期	8月中下旬 (鄭州市)	9月下旬 (鄭州市)
果房平均重量	600g	1,200g
果房最大重量	—	3,000g 以上
果粒平均重量	10.4g	10g
果粒最大重量	—	—
糖度	17.3度	16度
食味・食感	果粉が多い 成熟すると果皮と果肉が分離し易い 果肉は比較的柔らかい	果皮は薄い或いは中程度の厚さ 果肉は硬くてもろい
その他の特徴	—	落粒が少なく貯蔵・輸送性に特に優れる

出典) 孫 [5]、趙 [6] 参照。

1990 年代には一時巨峰が 50%以上占めたとされる。特に遼寧省は巨峰の大産地であり、また新疆産巨峰は特に食味が優れる。但し、巨峰は貯蔵性に劣るとともに、食味向上のためには単収を一定程度減ずる必要があるが、農民は高単収を望んでいる。このような中、生産量の増加で価格が低下し、また農民の高収量指向を背景に他の品種への転換が進んでいるものの、依然として巨峰のシェアは第 1 位とされている。

第3節 中国におけるブドウ加工品生産の概況

中国で生産されたブドウのおよそ 85%は生食用として消費されるが、他の 12.7%はワイン原料として、2.3%はブドウジュース及び干しブドウ原料として消費されている⁸。以下、それぞれの概況について見ていくこととしよう。

1) ワイン

中国のワイン生産技術は、1960年代にソ連と東欧から導入されていたものの、その技術と施設の普及は改革開放以降のことであった。70年代末、当時の轻工部発酵研究所の主導のもと、ワインの研究開発が進められ、今日では生産技術及び施設は国際水準まで高められているという。2008年の段階で、中国におけるワイン製造企業は 600 社余りに達している⁹。

これら企業の多数は、渤海湾沿岸のブドウ生産地域に立地しており、当該地域だけで中国ワイン生産量の約 80%を占める。しかしながら、近年、ワイン原料基地やワイン産業が西部へ移動する傾向が見られており、東部の大規模ワイン製造企業が寧夏回族自治区や甘粛省に続々と原料基地とワイン工場を設立している¹⁰。

中国におけるワイン向けブドウの生産面積は、5.33 万ha（生産面積の 12%、2007年の値）となっており、赤ワイン向けが 80%、白ワイン向けが 20%である¹¹。ワイン向け品種としては、赤ワインについては赤霞珠（カベルネ・ソーヴィニオン）、梅鹿輒（メルロー）、蛇龍珠（Cabernet Gernischt）、白ワインについては霞多麗（シャルドネ）、意ス林（イタリアンリースリング）が主に生産されている。

2) ブドウジュース

ブドウジュースの量産は近年始まったばかりとされ、天津市に 4 つのブドウジュース工場が立地している¹²。

3) 干しブドウ¹³

中国における干しブドウの生産量は 11.9 万トンで、世界の生産量の約 10%を占め、アメリカ、トルコ、イランについて世界第 4 位となっている。

主な生産地域は、新疆ウイグル自治区トルファンであり、当地だけで中国の干しブドウ生産量の 70%を占めている。

⁸ 田 [4] 参照。

⁹ 以上、中国におけるワイン製造技術の導入・普及については晁 [2] 参照。

¹⁰ 以上、ワイン製造企業の立地については田 [4] 参照。

¹¹ 馬ほか [3] 参照。

¹² 田 [4] 参照。

¹³ 田 [4] 参照。

第3章 中国ブドウ農業の事例調査

第1節 調査地域の概況

産地調査は、中国で第3位のブドウ生産量を誇る山東省の青島市平度市及び煙台市蓬萊市において実施した（図 3-1）（グラビア参照）。その中では、農家におけるブドウ生産状況、ワイン醸造企業におけるブドウ原料基地運営の実態について把握することができた。

はじめに、これら産地の概況についてみていくこととしよう。

1) 山東省青島市平度市大澤山鎮の概況¹⁴

平度市は、総面積 3,167km²で山東省内でも最大の面積を誇る青島市の県レベル市である。中でも大澤山鎮は、ブドウの伝統的な産地として知られている。その歴史は、2100 年以上にも渡るとされている。例えば、当地で元も早く生産されたブドウ品種「龍眼」については、唐の第 2 代皇帝太宗（在位 626～649 年）によって「獅子眼」という名を賜ったとされている。また、明朝末期～清朝初期には、年間生産量 2000 担（=100t）に達したとされる。1984 年、同鎮は「ブドウ生産專業鎮」としてブドウの生産を振興し、生産面積は 2,000ha に上った。現在では、ブドウの生産面積は 3 万ムー（1ムー=6.667a）以上に拡大し、平度市のブドウ生産面積 14 万ムーの約 21%を占めている。生産品種は 300 以上におよび、年間 25,000t のブドウが生産されている。

当地は、ブドウの生育に適した条件を備えている。温帯海洋性モンスーン気候に属し、縦横に走る山嶺が多くの川と小さな盆地を形成し、春暖かく、昼夜の温度差が大きく、積算温度が高く、適度な降水がある。土壌は肥沃で柔らかく、有機鉍物の含有量が高く、国内外の専門家に「中国のボルドー」と称されている。生産品種は龍眼に始まり、今日では、玫瑰香、澤香、澤玉、紅地球、巨峰、種無ブドウなど 40 以上の品種が生産されている。品質は高く評価されており、全国農業博覧会では 4 回連続で金賞を獲得し、昆明で実施された世界科学技術博覧会では金メダルを獲得した。このため、大澤山鎮は 1995 年に全国最初の「中国ブドウの郷（写真 3-1）」（グラビア参照）と命名され、2004 年には中国農業部によって「国家レベル大澤山ブドウ農業標準化モデル地区」に指定された。

本稿では、大澤山鎮上甲村における生食用ブドウ農業の実態について本章第 2 節において述べることとする。

2) 山東省煙台市蓬萊市の概況¹⁵

蓬萊市は、胶東半島の最北端に位置し、渤海、黄海に面している。総面積 1,128km²、人口 45 万人、

¹⁴ 本項の内容については、主として平度市ホームページ（<http://www.pingdu.gov.cn/html/2009-11/09111709372652179.html>）及び http://www.pingdu.gov.cn/html/2011-08/1108319193935484_1.html）によった。

¹⁵ 本項の内容については、主として蓬萊市ホームページ（<http://www.penglai.gov.cn/cn/gailan/index.jsp>）によった。

12の鎮（街）から構成されている。北緯37度付近に位置し、フランスのボルドー、アメリカのカリフォルニア州等、世界の著名なブドウ生産地域とほぼ同緯度である。地理的条件、気候条件、土壌条件等の優位性から、フランスの「ラフィット」のほか、中国の「張裕」、「長城」、「王朝」、「シヤングリラ」等、国内外の著名なワイン企業が進出している。2011年末現在、市内のワイン製造企業は70社、ワイナリーは16箇所、年間ワイン生産量は14万tに上っている。このような背景のもと、蓬萊市は「中国ワイン名城¹⁶⁾」と呼ばれている。

本稿では、中国ワイン原料生産基地におけるブドウ生産の実態について、蓬萊市に立地するJ社を事例に本章第3節において述べることとする。

第2節 生食用ブドウ生産の実態～山東省青島市平度市大澤山鎮上甲村の事例～

1) 上甲村の概況

上甲村は、200年余りのブドウ生産の歴史を持つ伝統的ブドウ産地の一つである。人口は460人、農家戸数は140戸、農地面積は850ムーで、うち80%はブドウで占められている。また、他の20%はオウトウ、ショウガと若干のモモ¹⁷⁾となっている。

以前は、ブドウの他に落花生、トウモロコシ、小麦等の油料作物、穀物も生産していたが、より収益性の高いブドウにシフトしてきており、現在ではほぼ皆無となっている。

ブドウ作の平均的な経営規模は4～5ムー/戸であり、1戸あたり世帯人員は3.3人で経営されている。また、ブドウの生産面積は最大でも7～8ムーとなっており、大規模化はあまり進んでいないものと考えられる。

2) 上甲村におけるブドウ品種構成と収益性

第2章第2節で述べたように、中国におけるブドウ生産品種は、赤ないし黒が主であるが、当村では異なる状況となっている。

現在主に生産されている品種は、白ブドウの澤山1号（表3-1）であり、75%を占めている。一方赤ブドウとしては玫瑰香（表3-1）が残りの25%を占めている。

澤山1号は、龍眼と玫瑰香を掛けあわせた品種であり、「澤香」とも呼ばれる。1956年に選抜され、1981年に品種名が登録された。果皮の色は緑黄色で成熟すると金黄色になる。果房の平均重量は450g、果粒の平均重量は6.3gで、大きなものでは果房820g、果粒8g以上となる。糖度は15.6度で甘酸適和、バラのような香りがあり、果皮が薄く果肉が柔らかで、裂果や落粒がなく、比較的貯蔵性・輸送性に優れる。1995年には、全国第2回農業博覧会で金賞を受賞しており、品質の高いブドウとされている¹⁸⁾。大澤山鎮上甲村での平均的な収穫時期は、8月末～9月末前後とのことであった。

（写真3-2）（グラビア参照）。

¹⁶⁾ 「名城」とは、「有名な都市」「有名な町」の意。

¹⁷⁾ モモの生産は、収益性の低さから次第に減少しているとのことであった。

¹⁸⁾ 澤山1号の特徴については、劉ほか[7]参照。

表3-1：上甲村において生産されているブドウ品種の特徴一覧

品種名	澤山1号	玫瑰香
果皮の色	緑黄色から金黄色へ	紫紅色或いは紫黒色
果房平均重量	450g	350g
最大重量	820g	820g
果粒平均重量	6.3g	6.2g
最大重量	8g	7.5g
糖度	15.6度	18～20度
食味・食感	バラのような香り 甘酸適和 果皮薄く果肉柔らか	バラのような香り 果皮は中程度の厚さ
その他特徴	裂果・落粒なく 貯蔵性・輸送性に優れる	—
単収	3,000～3,500kg/ムー	2,000～2,500kg/ムー
農家庭先価格	6～7元/kg	8元/kg
1ムーあたり 販売額	22,750元	18,000元

出典：劉ほか[7]、趙[6]参照。

表3-2：調査地域の主要農家経済指標

	中国	山東省	青島市	煙台市
1戸あたり人口（人）	3.98	3.57	3.41	2.9
農民一人あたり純収入（元）	5,153	6,119	9,249	8,642
農家1戸あたり純収入（元）	20,509	21,845	31,539	25,062
農民1人あたり農業純収入	1,498	1,954	2,269	3,526
農家1戸あたり農業純収入	5,962	6,976	7,737	10,225

出典：中国農業年鑑、中国農村統計年鑑、山東統計年鑑、青島統計年鑑、煙台統計年鑑

注：「農業純収入」については、「（農業収入）－（農業生産費用支出）」により算出しており、減価償却費、移転支出等は差し引かれていない。

一方の玫瑰香は、イギリス原産、1900年に中国に導入され、上述のように20世紀中期からの中国ブドウ農業における伝統的な主力品種の一つである。果皮は紫紅色或いは紫黒色で中程度の厚さがあり、果肉は柔らかく多汁である。バラのような香りがあり、糖度は18～20%である。果房の平均重量は350g、果粒の平均重量は6.2gで、大きなものでは果房820g、果粒7.5gとなる。1995年の農業博

覧会で金賞を受賞しており、品質の優れた品種とされている¹⁹。大澤山鎮上甲村における平均的な収穫時期は、9月中旬～10月末とのことであった。

以上のような特徴を持つ2品種の当地での生産・販売状況は、以下のとおりである。

まず、単収は澤山1号が3,000～3,500kg/ムーであるのに対して玫瑰香は2,000～2,500kg/ムーと、澤山1号のほうが収量は大きい。一方、農家庭先価格は澤山1号が6～8元/kgであるのに対して、玫瑰香は8元/ムーとなっており、価格は後者のほうが高い。しかしながら、1ムーあたりの販売額でみると、澤山1号が平均22,750元/ムーであるのに対して、玫瑰香は平均18,000元/ムーとなり、澤山1号のほうが大きくなっている²⁰。

もともと、上甲村で生産されるブドウ品種の主力は、中国全体の傾向と一致して龍眼であったが、玫瑰香の導入、巨峰の導入を経て、20年ほど前に澤山1号が導入され、収量や収益性の高さが知られるにつれ、当地に普及し、現在のような品種構成が定着してきた²¹。

収益は、全体として7,000～8,000元/ムーとのことであり、1戸あたりの収益は平均して33,750元、一人あたり収益では10,227元となる²²。これは、表3-2の青島市における農家1戸あたり農業純収入の4.4倍、農民1人あたり農業純収入の4.5倍の水準であり、ブドウ作が当地において高い有利性を持っていることを理解することができる。

3) ブドウの産地流通と出荷先

大澤山鎮では、各村にブドウ農業を兼業するブドウ販売の仲介人が3～4人居住しており、彼らが鎮外の集荷業者を探索すると同時に、その代理人としてブドウを集荷する。こうした仲介人は、一般に各村の大通りに面した場所に居住しており、集荷のため比較的広い庭を有している。一部、農家自ら卸売市場に持ち込んで販売するケースもあるが、極少数である。

基本的には仲介人が農家に提示した価格が生産コストに見合わない場合、農家は他の仲介人に当たることになる。しかしながら実際には、仲介人同士が価格情報を融通し、ある程度統一しているため、どの仲介人にあたってもそれほど価格が異なることはないという。

仲介人は集荷時にブドウの品質について特に、①粒の大小、②房ごとの腐敗状況、③食味に注意す

¹⁹ 玫瑰香の特徴については、劉ほか[7]参照。

²⁰ 澤山1号については、単収の平均値を3000～3500kg/ムーの間をとって3250kg/ムーとし、農家庭先価格の平均値を6～8元/kgの間をとって7元とし、両者を乗じて求めた。また、玫瑰香は、単収の平均値を2,000～2,500kg/ムーの間をとって2,250kg/ムーとし、農家庭先価格8元に乗じて求めた。

²¹ 現地調査による。なお、玫瑰香、巨峰の導入時期については、聞き取り調査の対象者も正確に記憶していなかったため、不明瞭であるが、中国の一般的な動向からして、前者が遅くとも20世紀中期、巨峰は1980年代頃に導入されたと考えられる。

²² 1ムーあたりの平均収益を7,000～8,000元の間をとって7,500元とし、1戸あたりの平均的ブドウ作経営規模を4～5ムー/戸(本節第1項参照)の間をとって4.5ムーとし、両者を乗じて求めた。

る。中でも粒の大小が評価に大きく関わっている。そのため農家も、粒の肥大に特に注意して生産する。食味に関しては、外見である程度の見当をつけるため、味見はほとんどせずに評価する。

また、万一生食用として販売できないものが出た場合は、ワイン醸造業者に買い取ってもらうことができるため、廃棄処分にするようなことはほとんどない。

こうして、仲介人を経て鎮外へ持ちだされたブドウの販売先としては①東北三省(黒龍江省、吉林省、遼寧省)向けに主として澤山1号、②地元である平度市内・青島市向けに主として玫瑰香が出荷されている。③その他、済南・濰坊(いずれも山東省)、徐州(江蘇省)へも若干出荷されている。なお、江蘇省以南からの引き合いはないということであり、ブドウの輸送性の限界が、一定の商圏の限界となって現れているものと考えられる。

大澤山鎮は、伝統的なブドウ産地として、特にかつて主力品種であった赤ブドウ(=龍眼、玫瑰香、巨峰)の産地として全国的な知名度を持っており、とりわけ地元の消費者の中での知名度は大きい。そのため「大澤山」ブランドをよく知る周辺地域の消費者の中では、依然として赤ブドウ(現在では玫瑰香)へのニーズが高い。

一方、農家の経営的な面を見ると、上述のように今や澤山1号の有利性は如実に現れてきており、「赤ブドウの産地・大澤山」の消費者イメージとは裏腹に、実態は白ブドウの主産地となっている。東北三省では、大澤山の知名度は地元ほど大きいものではないため、卸・小売段階で「大澤山」をことさらに強調する有利性はない。その意味では、むしろ産地にとっては「大澤山」ブランドから離れて自由に生産・販売することが可能ということもできる。このように、大澤山鎮では、一定の赤ブドウの生産量を確保することによって「大澤山」ブランドを維持しつつ、実態としては収益性を高めるため、白ブドウを主力に据えるという戦略をとっているものと評価できよう。

4) 大澤山鎮におけるブドウ祭り

大澤山鎮では、ブドウの販売促進のみならず、地元の自然・文化等の観光資源の活用、産業の振興を目的として、9月1日から10月30日までの2ヶ月間、一般消費者向けのブドウ祭り(ブドウ節)を開催している(写真3-3)(グラビア参照)。

ブドウ祭りは1987年に開催されて以降、毎年開催され、2011年には25回目の開催となった。著名人が訪れることもあり、中国の著名な詩人・賀敬之が詩を読み、また元全国人民代表大会副委員長・王光英は“西のトルファン、東の大澤山”と称えるなどし、当地産ブドウのプロモーションに一定の役割を果たしている。

ブドウ祭りの期間中、一般消費者は小高い山の頂上に設けられた会場にまず足を運び、そこで試食する。会場では、村ごとにブドウを展示しているため、消費者は試食の上、気に入ったブドウの産地(村)に移動する。そこで入場料15元を支払った上で自由にブドウを摘み取り、摘み取った重量に応じた代金を払って持ち帰る。この時のブドウの価格は、園地(村)の立地によって異なるが、概ね12～16元/kgとのことである。これは、上述の仲介人を通じて販売するブドウの農家庭先価格の2倍近い。

また園地の立地による価格差は、主として会場からの距離によって変動し、比較的遠方ほど安い傾

向があるという。加えて会場となっている場所は、小高い山の頂上付近で土地条件が良いことから、会場からの距離による価格差は、斜面の傾斜や土壌の肥沃度、排水等の諸条件の優劣をもある程度反映しているものと考えられる²³。

第3節 ワイン製造企業によるブドウ原料基地の実態～山東省煙台市蓬萊市の事例～

1) 調査対象企業・J社の設立の経緯

今回調査を行った企業は、中国でも有数の食糧貿易企業・C社のグループ企業であるJ社である。C社は、食糧や油料作物等の貿易を主な事業としながらも、菓子、飲料、酒、乳製品、麺、健康食品、調味料等幅広い食品のメーカーでもあり、また包装資材、服飾、不動産、ホテル等の販売・営業など、多角的な経営を行なっている。中でもワイン事業は、中国でも最も著名な銘柄の一つを確立している。

1999年、C社は山東省煙台市蓬萊市に1,300ムーの農地を確保して、既存ワイン銘柄の原料供給基地として、また既存銘柄をベースとしたより高級なブランドワインの生産を念頭においた実験ワイナリーとして、J社の前身となる組織を立ち上げた。

2007年、このワイナリーはJ社として独立し、新たなワイン銘柄を立ち上げるとともに、ホテルとゴルフ場を備えて営業を開始した（写真3-4）（グラビア参照）。

中国社会科学院での聞き取りによれば、中国国内のワイン各社では、原料の安定的な調達のため、ブドウ生産基地を相次いで設立すると同時に、ホテル、ゴルフ場も建設し、自社ワインをプロモーションする取り組みが増えてきているという。J社の取り組みも、そのような傾向の中の一事例と考えられる。

2) 原料基地におけるブドウ生産状況

1999年の開業以来、ブドウの生産面積は次第に拡大し、2006年には4,000ムーに達し、今日にいたっている。基地での原料ブドウの収穫量は1,500tであり、ここから1,000tのワインが生産されている。

生產品種は40種あり、主要なものとして赤霞珠（カベルネ・ソーヴィニオン、赤）40%、美楽（メルロー、赤）20%、香丹妮（シャルドネ、白）15%を挙げることができる。

土地の集約にあたっては、蓬萊市政府の全面的な協力を得ながら、比較的スムーズにすすめることができた。周辺計14村からできるだけ条件のよい土地を選んで集約し、その土地の農家を雇いブドウ生産が行われている。

雇用農家数は200戸あり、経営面積は1～100ムーと、一部の農家においては一定の大規模化がなされている。大規模化は、高齢等により退出した農家の土地を一部の農家が集約することによって可能となっている。

単収は、現状400～600kg/ムーとなっており、開業時（1999年）の1,500kg/ムーから大幅に減

²³ 実際、会場から徒歩圏内の園地の地代が800～1,000元/ムーであるのに対して、会場から自動車
で20分ほど要する上述の上甲村の地代は500元/ムーと、2倍近い差となっている。

らしている。これは、ブドウの品質を追求するため、あえて単収を抑えるよう指導してきたためである。

農家の収益は、平均2,400元/ムーであり、年によって若干変動する。作柄の良かった2009年は3,600元/ムーの収益を上げた農家もあったという。

労働力については、生産面積20ムーに対して、労働力2名（50代夫婦）の場合、雇用労働力は不要とのことである。作業は年に3～4回の耕起と、10回の農薬散布、3回の施肥に加え、収穫、剪定等であり、収穫を挟む3ヶ月間は忙しいが、他の時期は軽労働で済む。冬等の農閑期は、出稼ぎ等していない。当基地で最も平均的なこのような規模の農家にとって、年間の収益は48,000元/に達し、本章第2節で紹介した、生食用ブドウの生産農家をも凌いでいる。当基地開業（1999年）以前はもっぱら穀物の産地であったといい、それに比べても収益性の高いブドウ生産は、技術習得や農業資材の準備、年間の作業工程などの多くの部分を企業に依存し、軽労働で済むことから、農家にとっては極めて魅力的な農業といえよう。

3) ブドウ生産におけるJ社の役割

ブドウ生産におけるJ社の役割は3つまとめることができる。

第1に、生産技術の指導である。J社は技術指導者（常勤）を12人雇入れ、一人あたり約300ムー/人を管理させている。今回の聞き取り調査では、この技術指導者のうちの一人に対応していただいたが、中国国内の著名大学で博士を取得した経歴を持ち、高学歴であった。彼らを中心に、年数回の技術講習会が実施されている。特に剪定の講習会が重視されている。また、現場での指導も適宜行なっている。収穫期の見極めも、企業側の重要な指導の一つであり、サンプル調査を経て適期収穫を徹底している。

第2に、生產品種を選択である。生產品種を選択は、製造するワインの種類に直結するため、全てJ社側が選定、決定している。

第3に、農業資材の提供である。農薬や肥料の投入はブドウの品質や安全性を大きく左右するため、その選定、提供は全面的にJ社側の判断によって行われている。また、これら農業資材の費用はすべてJ社側が負担し、農家に無料で提供されている。

4) ワインの販売状況

J社のワインは、親会社であるC社が展開してきた既存銘柄の中で最高級の銘柄として位置づけられている。生産量も、当ワイナリーでの生産分に限られるため、販路はJ社が設置する専売店と、4つ星以上のホテルに限定されている。

価格は、300元/本以上と、中国で販売されているワイン価格としては最も高額な部類となっている。

最も一般的な販売形態は、瓶詰めであるが、樽（225リットル）単位での販売も行なっている。予め購入しておいたワイン樽を、当ワイナリーで保存しておき、顧客の要望に応じて、結婚式や宴会の席など、特別な祝いごとの際などに出荷するものである。

中国の全体的なワイン輸出の状況については、第1章で統計資料をもとに検討したが、その特徴は

ごく限られた量のみ輸出されていることだった。J社に対して、ワイン輸出に対する見解を尋ねたところ、他の伝統的なワイン生産国に比べ中国のブランド力は弱く、現状は検討していないとのことであった。

第4章 中国大消費地におけるブドウ販売状況

第1節 中国における北京・上海・広州の経済的位置

本事業では、中国における大消費地でのブドウ販売状況を把握するために、北京市、上海市、広州市での現地調査を実施した。主として実施したのは、品揃え・価格調査であり、量販店については当該の全都市で、自由市場（農貿市場）については広州市で、卸売市場については北京市と広州市で実施した。

具体的な状況について検討する前に、消費市場に関わる主要指標をもとに、中国における3都市の経済的地位についてみていくこととしよう。

まず、表4-1の中国における各省・自治区・直轄市の家計主要指標を見てみよう。それによると、一人あたり可処分所得については上海市（28,838元）、広州市（27,610元）、北京市（26,738元）の順に大きく、消費支出は、広州市（22,821元）、上海市（20,992元）、北京市（17,893元）の順に大きい。これら3都市は、中国で最も所得の高い地域ということが出来る。

消費性向は中国の中で広州市が83と最も大きく、上海市の73、北京市の67を大きく上回っている。また、食品への支出額は、広州市（7,345元）、上海市（7,345元）が中国のトップ2を占め、他の省市と比べても突出して大きく、北京市（5,936元）に対しても大きな差をつけている。

その中身をみてみると、まず、3都市とも果実、菓子類、外食への支出額は、他の省市に比べても突出して大きいことがわかる。また3都市を比較すると、北京市は果実・菓子類への支出額が最も大きい。一方、3都市の中でも広州市は果実・菓子類への支出額が最も小さいものの、外食への支出額は最も大きい。

以上のことから、中国の中でも最も購買力のある上海市、広州市、北京市では、菓子類や外食などへの支出が多く、いわば食生活の高度化が進んでいる。しかしながら、その内容を見ると、外食への支出を中心に食品全体の支出を抑えている北京市と、外食への支出を大きくして食品全体への支出を最も大きくしている広州市が対照的な位置にあり、その中間に上海市が位置づけられるということができよう。

ここまで、各都市の一人あたりの購買力についてみてきたが、次に全体の市場規模について見ていくこととしよう。

一般に食料の消費量は人口（＝胃袋の数）に規定されることから、表4-2によって、各市の人口を見ていくこととしよう。広州市（1,033万人）は、人口では上海市（1,921万人）・北京市（1,755万人）と比べて1.7～1.9倍の格差がある。このことは、一人あたりでは上海市に次ぎ、北京市をも上回る購買力を持ち、また一人あたり消費支出では中国で最も大きい広州市といえども、市場規模では上海市、北京市に大きく溝を空けられる大きな要因となることを意味している。

次に、各市の小売総額について見てみよう。図4-1に、中国における各省・自治区・直轄市の小売総額を示した。それによると、上記の人口に裏付けられた市場規模を反映して、1人あたりでは購買力の高い広州でも、小売総額については上海市、北京市に比べ7割程度の規模であることがわかる。

表 4-1：中国における主要家計指標（2009 年）

	一人あたり（元）		消費 性向	エンゲ ル係数	一人あたり支出額（元）			
	可処分 所得	消費 支出			食品			
						果実 (生鮮・乾燥)	菓子類	外食
上海市	28,838	20,992	73	35	7,345	522	201	2191
広州市	27,610	22,821	83	33	7,571	480	169	2634
北京市	26,738	17,893	67	33	5,936	563	207	1646
浙江省	24,611	16,683	68	34	5,605	421	106	1610
広東省	21,575	16,858	78	37	6,225	380	116	1584
天津市	21,402	14,801	69	37	5,405	445	160	1490
江蘇省	20,552	13,153	64	36	4,774	320	89	1066
福建省	19,577	13,451	69	40	5,336	357	78	886
山東省	17,811	12,013	67	33	3,954	370	102	764
全 国	17,175	12,265	71	37	4,479	333	91	976
内モンゴル自治区	15,849	12,370	78	30	3,773	289	52	880
遼寧省	15,761	12,325	78	38	4,681	446	106	917
重慶市	15,749	12,144	77	38	4,576	269	67	926
広西チワン族自治区	15,451	10,352	67	40	4,130	291	71	809
湖南省	15,084	10,828	72	39	4,175	320	66	817
河北省	14,718	9,679	66	34	3,251	249	75	506
雲南省	14,424	10,202	71	44	4,461	284	73	1337
河南省	14,372	9,567	67	34	3,273	241	73	647
湖北省	14,367	10,294	72	40	4,161	246	87	799
陝西省	14,129	10,706	76	37	3,989	331	103	1122
安徽省	14,086	10,234	73	40	4,051	266	92	670
寧夏回族自治区	14,025	10,280	73	33	3,432	318	53	835
江西省	14,022	9,740	69	40	3,882	297	77	565
吉林省	14,006	10,914	78	33	3,637	356	63	622
山西省	13,997	9,355	67	33	3,072	230	62	621
四川省	13,839	10,860	78	40	4,392	277	67	727
海南省	13,751	10,087	73	45	4,508	273	61	959
西藏自治区	13,544	9,034	67	51	4,582	226	32	681
貴州省	12,863	9,048	70	42	3,756	280	64	742
青海省	12,692	8,787	69	40	3,549	281	64	665
黒龍江省	12,566	9,630	77	35	3,397	329	64	654
新疆ウイグル自治区	12,258	9,328	76	36	3,386	326	77	723
甘肅省	11,930	8,891	75	38	3,359	276	54	752

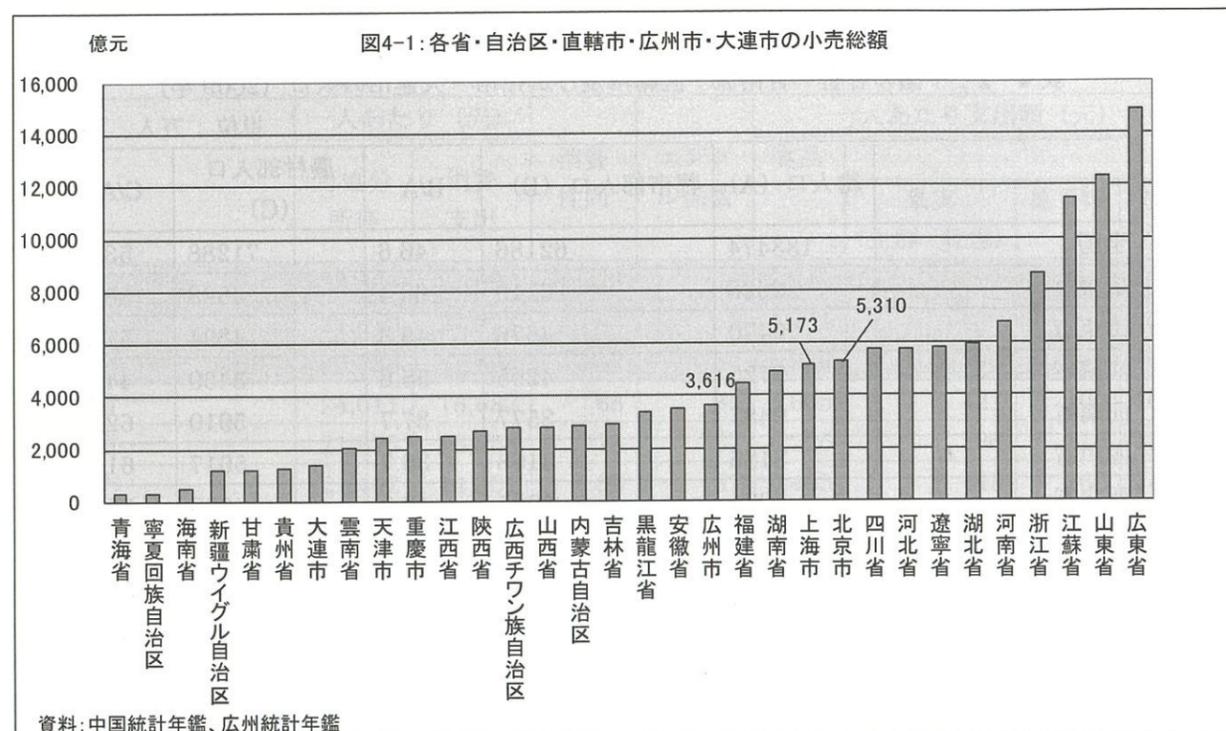
出典：中国統計年鑑、広州統計年鑑

表 4-2：中国の各省・自治区・直轄市及び広州市・大連市の人口（2009 年）

単位：万人、%

	総人口 (A)	都市部人口 (B)	B/A	農村部人口 (C)	C/A
全国	133474	62186	46.6	71288	53.4
広東省	9638	6110	63.4	3528	36.6
山東省	9470	4576	48.3	4894	51.7
江蘇省	7725	4295	55.6	3430	44.4
河南省	9487	3577	37.7	5910	62.3
四川省	8185	3168	38.7	5017	61.3
河北省	7034	3025	43.0	4009	57.0
浙江省	5180	2999	57.9	2181	42.1
湖南省	6406	2767	43.2	3639	56.8
湖北省	5720	2631	46.0	3089	54.0
遼寧省	4319	2607	60.4	1712	39.7
安徽省	6131	2581	42.1	3550	57.9
黒龍江省	3826	2123	55.5	1703	44.5
江西省	4432	1914	43.2	2518	56.8
広西チワン族自治区	4856	1904	39.2	2952	60.8
福建省	3627	1864	51.4	1763	48.6
上海市	1921	1702	88.6	219	11.4
陝西省	3772	1641	43.5	2131	56.5
山西省	3427	1576	46.0	1851	54.0
雲南省	4571	1554	34.0	3017	66.0
北京市	1755	1492	85.0	263	15.0
重慶市	2859	1475	51.6	1384	48.4
吉林省	2740	1461	53.3	1279	46.7
内モンゴル自治区	2422	1293	53.4	1129	46.6
貴州省	3798	1135	29.9	2663	70.1
天津市	1228	958	78.0	270	22.0
広州市	1033	899	87.0	134	13.0
甘肅省	2635	860	32.7	1775	67.4
新疆ウイグル自治区	2159	860	39.9	1299	60.2
海南省	864	424	49.1	440	50.9
寧夏回族自治区	625	288	46.1	337	53.9
青海省	557	233	41.8	324	58.1
西藏自治区	290	69	23.8	221	76.2

資料：中国統計年鑑、広州統計年鑑



第2節 北京・広州におけるブドウの卸売状況

1) 北京市豊大新発地農産品批発市場の概要

北京市豊大新発地農産品批発市場（以下、北京卸売市場）は、1998年、小規模な農貿市場²⁴として設立されて以降、次第に規模を拡大し、現在では、敷地面積1,200ムー超、建物面積30万m²、年間取引額360億元、一日の取扱量は野菜13,000t以上、果実15,000t以上、豚・羊それぞれ2,500頭以上、牛150頭以上、水産物1,500トン以上などとなっている。同市場は北京市の野菜供給量の70%、果実供給量の80%、輸入果実の供給量90%をそれぞれ占め、首都の食料供給の一大拠点となっている²⁵。

同時に、北京卸売市場は「農産品総合市場」としては中国最大（販売額ベース）の規模を誇る卸

²⁴ 農貿市場とは日本で言うところの自由市場である。主として一般消費者への食料品の小売販売が行われる。今日のようにスーパーや百貨店が十分普及していない段階では、一般消費者が青果物等の食料品を買い求める場所として最も重要な位置を占めていた。今日では、主として卸売市場として機能している。

²⁵ 以上、北京市豊大新発地農産品批発市場の概要については新発地農産品交易網 (<http://web.xinfadi.com.cn/>) 参照。

売市場である²⁶。また、農産物のほか、各種原材料（農業資材・機械、石炭、木材、建材、化学製品、金属、機械一般、電子機器等）、加工食品、飲料、酒類、被服、履物、日用品、文化用品、貴金属、電器、医薬・医療用品、家具、自動車・バイク、花・鳥・魚・虫、骨董等各種卸売市場をすべて含めた「商品交易市场」として中国で第15位（販売額ベース）の地位にある²⁷。

2) 広州江南果菜批発市場の概要

広州江南果菜批発市場（以下、広州卸売市場）は、1994年に設立され、敷地面積40万m²、1日あたりの野菜取扱量は広州に上場される野菜の70%に相当する10,000t、輸入果実の取扱量は全国の輸入果実の70%を占める。同時に、「乾燥・生鮮果実市場」としては国内最大の規模を誇り、中国における果実の集散地として一大拠点となっている²⁸。

3) 北京市、広州市の卸売市場におけるブドウの販売状況

表4-3に、両市場におけるブドウの取り扱い品種および価格を示した。

第1の特徴は、調査を実施した1~2月（北京市は1月11日、広州市は2月18日）の段階においては、国産のブドウを目にすることはできなかったということである。この時期、少なくとも1月は、たとえば北京市郊外では施設栽培によるブドウが一定生産されていることが確認されているものの²⁹、極めて限定的にしか流通していないものと考えられる。広州卸売市場での聞き取りによれば、中国産のブドウが出回り始めるのは5・6月以降とのことであった。

第2に、1~2月は、中国輸入ブドウの原産地が入り替わる時期に差し掛かっていること、その中で、輸入ブドウに対するいくつかの評価軸が判明したことである。1月の北京調査時は、依然としてアメリカ産ブドウが主流をなしていたものの、2月の広州調査時には南アフリカ、ペルー、チリ産ブドウが主流となっている。また、1月の北京での調査時は、仲卸A社への聞き取りによれば、チリ産は出回り始めたばかりで食味が劣るため、アメリカ産ブドウより価格を低く設定しているとのことであった。一方、2月の広州での調査時は、仲卸C社への聞き取りによれば、アメリカ産はシーズン終盤で鮮度が低下してきていることから、チリ産ブドウより価格を低く設定しているとのことであった。また、以上のような産地リレーに関わる評価とは異なるものの、同じ原産国のもの

²⁶ 「農産品総合市場」とは、穀物、油脂、食肉、卵、水産物、野菜、乾燥・生鮮果実、繊維、家畜、たばこ等、農産物全般を取り扱う卸売市場を指す。国家統計局貿易外経統計司編 [8]。

²⁷ 国家統計局貿易外経統計司 [8]。

²⁸ 広州卸売市場の概要については、同市場ホームページ (<http://www.jnmarket.net/>) 参照。

²⁹ 中国農業大学で調査を実施した際、同大学の試験圃場で施設栽培されたものとして「赤堤」が振る舞われた。また、次節で述べるとおり、北京市、上海市の小売店で地元産のブドウを一部見ることができた。

表 4-3：北京卸売市場及び広州卸売市場におけるブドウ品種と価格

市場	産地	品種名	価格 (元・kg)	荷姿	備考
北京	アメリカ	紅堤	38.9	9kg 箱	
	アメリカ	紅堤	37.8	9kg 箱	
	アメリカ	紅堤	35.5	9kg 箱	仲卸 A 社
	チリ	紅堤	31.1	9kg 箱	仲卸 A 社
	アメリカ	紅堤	26.7	9kg 箱	
広州	オーストラリア	オータムロイヤル (黒)	38.9	9kg 箱	
	南アフリカ	スグラサーティ (黒)	36.7	4.5kg 箱	
	南アフリカ	トンプソンシードレス (白)	33.3	4.5kg 箱	
	南アフリカ	ラリーシードレス (赤)	31.1	4.5kg 箱	
	南アフリカ	ラリーシードレス (赤)	28.9	4.5kg 箱	
	南アフリカ	スグラサーティ (黒)	28.9	4.5kg 箱	
	南アフリカ	スグラサーティ (黒)	21.1	4.5kg	
	南アフリカ	ホワイトシードレス (白)	17.8	4.5kg	
	南アフリカ	トンプソンシードレス (赤)	—	9kg 箱	
	ペルー	紅堤	30	10kg 箱	
	ペルー	紅堤	26	10kg 箱	
	ペルー	レッドグローブ (赤)	30	10kg 箱	粒大 仲卸 B 社
	ペルー	レッドグローブ (赤)	25	10kg 箱	粒小 仲卸 B 社
	アメリカ	黒加倫 (黒)	20	8kg 箱	シーズン終盤 仲卸 C 社
チリ	ローヤルシードレス	21.25	8kg 箱	新鮮 仲卸 C 社	
チリ	ブラックシードレス (黒)	—	9kg 箱		

出典：現地での聞き取り調査による

でも、粒の大きさによって価格が異なるということも確認された (仲卸 B 社への聞き取りによる)。以上のように、出荷時期による食味と鮮度の相違、粒の大小が、市場での評価軸として重要な位置を占めているものと考えられる。

第 3 に、一般的に中国で赤ブドウは「紅堤 (紅堤子)」、白ブドウは「青堤 (青堤子)」、黒ブドウは「黒堤 (黒堤子或いは黒加倫)」と称されて小売されている³⁰が、実際はこれら名称が複数の品種を包含していることである。北京卸売市場での調査時は、いくつかの果実仲卸業社にて品種名と価格について聞き取り調査をしたが、その際いずれの業者も品種名の問いに対しては「紅堤」或いは「紅堤子」と答えるのみで、それ以上細かな品種名まで把握することは出来なかった。それに対し、広州卸売市場での調査時は、仲卸業者への北京同様の聞き取り調査と同時に、印字等の確認を実施することにより、品種名を把握することとした。その結果、「赤堤」で言えばラリーシードレス、トンプソンシードレス、レッドグローブ、「青堤」ではトンプソンシードレス、ホワイトシードレス、「黒堤」で言えばスグラサーティ、オータムロイヤル、ブラックシードレス等が該当することがわかった。限られた調査時間の中で確認できた限りであるので、実際はより多くの品種が取引されているものと考えられる。

第 3 節 北京・上海・広州におけるブドウの小売状況

ブドウの小売状況については、北京市、上海市、広州市の 3 都市において、高級スーパーとされる香港系スーパー O、大衆向けスーパーとされる欧州系スーパー C のほか、日系スーパー I、中国系百貨店で、産地、品種、価格についての情報を収集した。更に広州では、自由市場においても同様の調査を実施した。

表 4-4 は、スーパー、百貨店での調査結果をまとめたものである。その特徴としてあげられるのは、第 1 に今回の調査期間である 1~2 月 (北京市は 1 月 8~10 日、上海市は 1 月 13~15 日、広州市は 2 月 17~19 日) においては、中国産のブドウは、北京市の香港系スーパー O で北京産を、上海市の同スーパーで上海産を確認できたほかは、殆ど見られなかったことである。一方、アメリカ産、チリ産等、輸入物が小売店の棚の大部分を占めていた。

第 2 に、中国産と輸入物との価格差である。中国産が 27.6~37.6 元/kg であるのに対して、輸入物は 27.6~136 元/kg と最大で 4 倍以上の価格差となっている。これだけの価格差があるにもかかわらず、例えばリンゴほど高い貯蔵性の無いブドウが輸入物で占められるのは、一定の需要があることによるものと考えられる³¹。

第 3 に、品種名の表記が、「紅堤 (紅堤子)」、「青堤 (青堤子)」、「黒堤 (黒加倫)」に限定されていることである。言い換えれば、ブドウの色によって、「紅」、「青」、「黒」というよ

³⁰ 次節にて、小売段階でのブドウ品種名の表記について詳しく紹介することとする。

³¹ 輸入ブドウに対する消費者の意識については、次節で取り上げる。また今回調査期間である 1~2 月の段階において、例えばリンゴについては、冷蔵物の中国産が小売店の棚の大部分を占めており、ブドウとは好対照であった。

表 4-4：北京・上海・広州の小売段階におけるブドウの品揃えと価格（スーパー・百貨店）

都市	小売店	産地	品種	価格（元/kg）	
北京	香港系スーパーO	アメリカ	黒加倫	136	
		アメリカ	青堤	120	
		チリ	紅堤	96	
		アメリカ	紅堤	96	
		北京	紅堤	27.6	
	日系スーパーI	アメリカ	青堤	76	
		アメリカ	紅堤	76	
		アメリカ	黒加倫	76	
		アメリカ	種無紅堤	76	
上海	香港系スーパーO	チリ	青堤子	97.6	
		チリ	黒堤	85.6	
		チリ	紅堤子	83.6	
		チリ	種無紅堤子	79.6	
		アメリカ	紅堤	73.6	
		アメリカ	黒堤	79.6	
		上海	特選珍玉葡萄	37.6	
	中国系百貨店	チリ	黒堤	63.6	
		アメリカ	青堤	58	
		チリ	紅堤	48	
		ペルー	紅堤	48	
	欧州系スーパーC	チリ	紅堤	59.6	
		アメリカ	種無紅堤	31.6	
	広州	香港系スーパーO	アメリカ	紅堤（粒大）	59.6
			アメリカ	紅堤（粒小）	32
チリ			紅堤	59.6	
アメリカ			黒堤	59.6	
アメリカ			種無紅堤	52	
アメリカ			青堤	27.6	
欧州系スーパーC		チリ	黒堤	51.6	
		チリ	青堤	39.6	

出典：現地調査による

表 4-5：広州の小売段階におけるブドウの品揃えと価格（自由市場）

	産地	品種	価格（元/kg）	備考
小売店 A	アメリカ	黒加倫（粒大）	26	
	アメリカ	黒加倫（粒小）	16	
	輸入	青堤（粒大）	24	
	輸入	青堤（粒小）	20	
小売店 B	輸入	青堤（粒大）	24	
	輸入	青堤（粒小）	20	
	輸入	黒堤（粒大）	20	
	輸入	黒堤（粒小）	14	
	輸入	紅堤（粒大）	16	
	輸入	紅堤（粒小）	10	
小売店 C	輸入	紅堤	38	冷蔵保管
	輸入	青堤	38	冷蔵保管

出典：現地調査による。

うに、3種類に分類するのみとなっていることである。種無の場合は、以上の表記に「種無」と加筆する程度である。前節で明らかにしたように、実際には卸売市場段階での多様な品種のブドウが輸入されているにもかかわらず、小売段階では品種名が単純化されている。

第4に輸入ブドウの価格帯が、北京市の96～136元/kg、上海市の31.6～97.6元/kg、広州市の32～59.6元/kgの順に高くなっていることである。本章第1節で触れたように、中国における輸入果実の70%が広州卸売市場を経由していることから、広州市を起点に上海市、北京市等、全国各地に輸入ブドウが輸送されている部分が一定あると考えられる。よって、広州からの距離に応じて、主として輸送費を反映して価格差が生まれているものと考えられる。

第5に、前節で示した卸売市場価格と比較すると、北京市では2.5～5倍（卸売市場価格26.7～38.9元/kgに対し小売価格96～136元/kg）、広州市では最大3.3倍（卸売市場価格17.8～38.9元/kgに対し小売価格32～59.6元/kg）というように、小売価格との価格差が大きいことである。また、北京市の方が、卸売価格と小売価格の差がより大きい。

次に、表4-5に掲げる自由市場でのブドウの産地、品種、価格についてみてみよう。その特徴の第1は、中国産のブドウは一切販売されていないことである。

第2に、輸入ブドウについては、明示されていた産地としては、アメリカのみであったことである。他のブドウについては、店主への直接の聞き取りにおいても、輸入物であるとの回答のみで、どの国のものであるかについては不明との回答であった。

第3に、鮮度管理が十分になされていないことである。表4-5には、小売店A~Cの3店について掲げているが、小売店Cのみ店舗を構え、若干のブドウを冷蔵保管して販売し、他の小売店A・Bは露天下で見世棚に商品を陳列して販売する形態であった。前者のブドウの保存状態が良好であったことは言うまでもないが、後者においては、店頭で店主ないし店員がブドウの房にこまめにハサミを入れ、鮮度の落ちた粒を取りのぞく姿が見られた。また、こうしたブドウには、穂軸の部分に褐変が見られ、その意味でも鮮度の低下は明らかであった。(写真4-1) (グラビア参照)

こうした販売形態の違いを反映して、第4の特徴としてあげられるのは小売店Cの価格が、表4-4で掲げた広州市におけるスーパーの価格帯(32~59.6元/kg)に匹敵する水準にあるのに対して、小売店A・Bの価格帯(10~26元/kg)は本章第2節で掲げた広州卸売市場における価格帯(17.8~38.9元/kg)と同等、或いは下回る水準にある。自由市場での聞き取りによれば、同市場で販売されている輸入ブドウは、広州卸売市場で仕入れてきたものであるという。通常は広州卸売市場での仕入価格と、自由市場の各店舗の取り分としての労賃や諸々の費用の和を小売価格とすべきであろう。しかしながら、今回の調査で把握できた自由市場の小売価格は、一部で仕入れ価格を下回る水準にある可能性があるものと考えられる。その要因としては、上述の小売店A・Bに見られるような露天下で鮮度管理のもと、鮮度の低下に応じて値引きして販売している可能性が考えられる。(写真4-2) (グラビア参照)

第4節 広州消費者のブドウ購買状況

1) 広州消費者の普段のブドウの購買行動と中国産ブドウへの評価

広州市では、小売状況調査とともに、一般消費者のブドウ購買行動に関するアンケート調査も実施した³²。表4-6はその結果のうち、特に普段のブドウ購買状況について取りまとめたものである。全部で10名から回答を得、うち女性7名、男性3名、年齢は20~40歳代、いずれも職業を事務職とする給与所得者であった。また、回答者番号8については、属性と購入頻度以外については回答を得られなかった。また、回答者番号10については、ブドウを購入しないとの回答であったため、それ以上の回答は得られなかった。

まず、ブドウの購入頻度は、月2~3回が2名、月1回が3名、半年に2~3回が2名、半年に1回が1名、年1回が1名、「買わない」が1名であった。アンケート調査票の選択肢としては、この他に「毎日」、「週2~3回」、「週1回」という選択肢も設けたものの、これだけの高い頻度で購入している消費者は見られなかった。

次に1回あたりの購入量については、0.5~1kgの範囲であった。また、購入価格は、5~50元/kgと幅が大きい。この背景としては、日常的に外国産ブドウを購入しているか否かがある。購入価

³² アンケート調査票については、報告書末尾に掲載しているので、参照されたい。

表4-6: 広州消費者の日常的なブドウ購買状況と中国産ブドウへの評価

属性	回答者番号										
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
性別	?	女	女	女	女	女	女	男	男	男	
年齢	?	30	?	23	20代	29	40	?	35	43	
職業	事務職員	事務職員	事務職員	事務職員	事務職員	事務職員	事務職員	事務職員	事務職員	事務職員	
購入頻度	月2~3回	月2~3回	月1回	月1回	月1回	半年2~3回	半年2~3回	半年1回	半年1回	買わない	
購入数量(kg/回)	1	0.5	0.5	0.5	1	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	
購入価格(元/kg)	12~40	30	40	36~50	5~7	50	12~20	12			
産地	新疆	新疆	(外国)	新疆	新疆	新疆	外国				
購入場所	百貨店 蔬菜市場 専門店	専門店	スーパー 専門店	スーパー 専門店	スーパー 百貨店 専門店	専門店	スーパー 専門店	スーパー 専門店	スーパー	わからない	
普段購入しているブドウの特徴	色	赤	黒	青	赤	青 黒	黒	黒	黒	黒	
	種	種有	種無	種無	種無	種無	種無	種無	種有	種有	
	皮	厚	薄	薄	薄	薄	薄	薄	薄	薄	
	味	甘	甘	甘	甘	甘	甘	甘	甘	甘	甘
	粒	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大
購入の際重視する点(順位)	味	2	5	3	3	1	1	1	1	1	
	色	3	2	7	2	2	6	6	4	4	
	粒の大小	1	1	6	8	3	3	4	7	7	
	品種	3	3	3	1	2	2	2	2	2	
	鮮度	3	7	5	6	2	3	3	3	3	
中国産ブドウへの評価(5段階評価)	安全性	4	4	4	4	3	3	3	3	3	
	価格	3	2	2	2	3	3	3	3	3	
	包装	3	2	2	3	3	3	3	3	3	
	味	3	2	3	4	4	3	3	3	3	
	色	3	2	3	3	4	3	3	3	3	

出典: アンケート調査による。

格の高い購入者番号3・4・6は、普段購入しているブドウの産地として、新疆に加えて外国と回答している。また、産地に関する回答として最も多かったのは「わからない」であり、消費者が産地を意識することなく購入しているという実態も垣間見える。

購入場所は、スーパーと専門店が最も多く6名、次いで百貨店が2名、蔬菜市場が1名となっている。

前節で指摘したように中国の小売店では、ブドウの品種名については色の違いによって「紅」、「青」、「黒」と区別するのみであることから、消費者の段階において細かな品種名が把握されていないことが考えられる。そこで、本アンケートの設問では、普段購入しているブドウの品種名を問うのではなく、特徴について問うこととした。

その結果、色の点で言えば黒が最も多く5名、次いで赤が3名、青が2名となった。上述のように、中国におけるブドウの主力品種の1つとして、巨峰が位置づけられることと関連性して、黒ブドウに対する指向が高いものと考えられる。また種については種無が4名、種有りが2名となり、種無ブドウへの指向も一定あるものと考えられる。皮は「薄い」が4名、「厚い」が1名となり、皮ごと食べられる前者への指向があることがわかる。食味、粒の大小についてはより甘いもの、より大きい物を求めているものと考えられる。

購入する際に重視する点としては、味、色、粒の大小、品種、鮮度、安全性、価格、包装の8項目の中から重要視しているものを選択した上で、順位付けを求めた。表4-7は、重視する項目として第1位に選ばれた場合は8点、第2位に選ばれた場合は7点、というように順位に応じ得点をつけ³³、その合計を求めたものである。その結果、得点が最も高かったのは、味、第2位が鮮度、第3位が価格という順になった。

表4-7: 「購入の際重視する点」のスコア

	購入者番号										合計	順位
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
味	7	4	8	6	8	8	8		8		57	第1位
鮮度	8	5	6	8	6	7	7		7		54	第2位
価格	6	3	5	4	7		4		6		35	第3位
粒の大小		8	7	5			5		3		28	第4位
色		7	2	7			3		5		24	第5位
安全性		2	4	3			6		4		19	第6位
品種		6	3	1		6			2		18	第7位
包装		1	1	2			2		1		7	第8位

出典：現地調査による。

³³ 選ばれなかった場合は0点とした。

表4-8: 中国産ブドウへの評価の得点

	購入者番号										合計	順位
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
鮮度	0	-1	0	1	1	1	0		0		2	第1位
価格	1	1	0	0	0	0	0		0		2	同上
粒の大小	0	-1	0	0	1	1	0		1		2	同上
味	0	-1	0	1	1	0	0		0		1	第4位
色	0	-1	0	0	1	0	0		1		1	同上
包装	0	-1	-1	0	0	0	0		0		-2	第6位
安全性	-2	-1	-1	1	0	0	-1		0		-4	第7位

出典：現地調査による。

中国産ブドウへの評価は、味、色、粒の大小、鮮度、安全性、価格、包装の7項目について、非常に良い、良い、普通、悪い、非常に悪い、の5段階評価を求めた³⁴。表4-8は、非常に良いには+2点、良いには+1点、普通には0点、悪いには-1点、非常に悪いには-2点をつけ、その合計点を求めたものである。その結果、全体としては、鮮度、価格、粒の大小、味、色について正の評価となった一方、安全性と包装については負の評価となった。

2) 広州消費者の外国産ブドウの購買行動と外国産ブドウへの評価

アンケート調査ではさらに、広州消費者の外国産ブドウの購入状況についても問うた(表4-9)。その結果、過去1年間に外国産ブドウを購入した経験を持つ消費者が3名あった。

うち2名は、自家消費用として日常的に購入しているとし、1名は春節や中秋節等の機会に贈答用として購入しているとの回答であった。

表4-9: 広州消費者の外国産ブドウの購買行動

回答者番号	3	4	6	
性別	女	女	女	
年齢	?	23	29	
過去1年間の購入回数	10	3	3	
購入機会	日常的	日常的	春節 中秋節	
購入目的	自家消費	自家消費	贈答	
価格	60	50	70	
産地	アメリカ	チリ ペルー	わからない	
購入場所	スーパー	スーパー	スーパー 専門店	
過去に購入した外国産ブドウの特徴	色	黒	青 赤青 黒	
	種	種無	種無	種無
	皮	皮薄	皮薄	皮厚 皮薄
	味	甘	甘	甘
	粒	大	大	
外国産ブドウへの評価(5段階評価)	味 色 粒の大小 鮮度 安全性 価格 包装	4 4 4 4 4 2 4	4 3 3 3 3 2 3	4 4 4 4 4 2 4

出典：アンケート調査による。

³⁴ 価格については、非常に安い、安い、妥当、高い、非常に高い、の5段階評価。

価格は50～70元/kgで、産地はアメリカ、チリ、ペルーであった。そのブドウの特徴は、色については黒、赤、青のいずれも挙げられたが、種については3名とも種無を、皮については3名とも薄いものを買求めていた³⁵。食味については甘いもの、粒については大きいものにニーズがある。

また、購入場所はスーパーないし専門店であった。

外国産ブドウへの評価を、上述の中国産ブドウへの評価と同様の方法で問うた。その結果を得点化したものが、表4-10である。味、色、粒の大小、鮮度、安全性、包装についてはプラスの評価であったが、価格についてのみマイナスの評価、すなわち「高い」という評価がなされている。また、表4-8の中国産ブドウに対する評価と比較して対照的な点として、①中国産ブドウの価格に対しては「安い」という評価であったのに対し、外国産ブドウに対しては「高い」という評価であったこと、②中国産ブドウに対する安全性及び包装に対する評価が負であったのに対して、外国産ブドウに対しては正であったことが指摘できる。

表4-10：外国産ブドウへの評価

	購入者番号			合計
	3	4	6	
味	1	1	1	3
色	1	0	1	2
粒の大小	1	0	1	2
鮮度	1	0	1	2
安全性	1	0	1	2
価格	-1	-1	-1	-3
包装	1	0	1	2

出典：アンケート調査による

第5章

第1節 要約

以上、本事業での調査内容について項目別に見てきたが、最後に全体を通して考察し、まとめることとしよう。

中国におけるブドウ農業は、本事業の調査対象の一つである山東省青島市平度市大澤山鎮に見られるような、長い歴史を持つものである。その中でも特に、改革開放以降、商業的農業の拡大と寒冷や多雨といった中国の多様な気象条件を克服する施設栽培技術の確立と共に、急速にブドウの生産量は拡大していった。同時に、ワイン生産量、ブドウ輸出入量も増大し、世界のブドウ産業における中国の地位は最も高い水準にあるといえよう。

この間、巨峰が半分以上のシェアを占める時期を経て、生産品種の多様化が進んだ。赤ないし黒の品種が主流をなしているものの、大澤山鎮で見たように、収量と収益性を背景としながらあくまでも合理的な品種選択がなされている。すなわち、大澤山鎮の事例に即して言えば、赤ブドウの産地としてのブランドや知名度に反して、実態は収量・収益性の高い白ぶどうが主力品種となっている。しかしながら、赤ブドウの生産量も一定維持し、特に産地近隣の消費地をターゲットに当該品種を販売すると同時に、ブドウ祭りによって産地に消費者を呼び込んでプロモーションを図り、伝統的なブランドイメージを保持している。

また、ワイン生産量の拡大が進む中で、ワイン製造企業は安定的な原料ブドウの確保を目的に、ブドウ生産基地の設立を進めている。一部の基地は、ワイナリーとして、宿泊施設やゴルフ場も併設し、ブランドの確立、プロモーションを図ろうとしている。本事業で調査対象とした基地では、ワイン製造企業が、地元政府との協力関係のもとに広大な農地を集約し、既存の農家に耕作を請け負わせ、品種の選択、農業資材の無償提供、生産技術の普及、収穫時期の見極めまできめ細かく管理することによって、安定的な原料の確保を企図している。一方、同基地で仕事を請け負う農家は、ブドウ生産における自主性は殆どないものの、企業によって高い収益性を保証され、生食用ブドウ農家以上の所得を得ている。こうしたブドウ農業の形態は、農家にとっては高所得を得られるというメリットがある一方、あくまでも主導権を握るのは資力のある企業であって、農民の主体的対応によってこうしたモデルを広く普及するという事は期待できない。

一方消費地においては、中国最大の購買力を持つ北京市、上海市、広州市で、ブドウの販売状況並びに消費者の購買行動について明らかにした。調査時期が、中国産ブドウのオフシーズンということで、輸入ブドウの販売状況を主として把握するにとどまったが、いくつかの興味深い知見を得ることができた。

卸売段階でのブドウ取引において、重要な評価軸は、食味と鮮度、粒の大小であった。中国に輸

³⁵ 消費者への聞き取りによると、中国でのブドウの食べ方としては、種の有無や皮の厚さ、皮と果実の離れ易さ等、品種ごとの特性に応じて、皮ごと食べたり、皮を剥いて食べたり、一度皮ごと口に含んだあと皮のみを吐き出す等、日本での食べ方と大きな違いは見られなかった。

入されるブドウの品種は多様であるが、店頭で販売される段階では、単に色別に「紅」、「青」、「黒」と区別されるのみであった。のみならず、仲卸業者のレベルでは品種名について、自由市場での小売業者のレベルでは品種名に加え原産国についての情報まで、十分に認知されていなかった。

消費地での価格水準は、輸入ブドウに関しては、広州市が中国最大の輸入果実の集散地となっていることも関わって、広州より上海、上海より北京の方が高価格となっていた。また、同じ小売段階とはいえ、自由市場の露天での販売価格と、自由市場の店舗ないしスーパー百貨店等とでは、価格水準に著しい開きがあることも明らかとなった。このことに関わって、自由市場の露天では、鮮度管理が不十分であることもわかった。

消費者の購買行動については、所得水準の向上という中国における一般的な傾向を背景として、日常的に外国産ブドウを購入する例が現れてきている。外国産ブドウと中国産ブドウへの評価を比較すると、価格については前者が高く後者が安いという評価であり、また安全性については中国産に対して悪い、外国産に対して良いという評価がなされていた。

第2節 考察

中国のブドウ市場は、急速に供給量が増大してきているものの、依然として需要超過状態にあり、ブドウ農家の収益性は生食向け、加工原料向け、何れにしても高い収益性となっている。技術革新もあってブドウの産地は比較的広範に立地可能であると同時に、中国の人口は引き続き増大するため、今後もブドウ生産量の拡大は続くものと考えられる。所得水準の向上によって、日常的に輸入ブドウを消費する例も現れてきている。よって、日本産ブドウも、他の外国産ブドウと同様に輸入ブドウとして中国消費者に受け入れられる素地はあるものといえよう。但し、すでにわが国から中国への輸出実績のあるリンゴの例のように、アメリカ、チリ産等の輸入物に対してかけ離れた高価格となる場合には、食味や外観上の明瞭な差別化がなされていることが求められよう。この部分の検証は、日本国内における産地調査や輸出商社等への調査によって、輸出コストの積み上げ等によってなされる必要がある。今後の課題として指摘しておきたい。

また、今回の調査では十分に掘り下げることは出来なかったが、青島市において農業資材の販売を手がける企業が、ブドウ生産に参入するべく用地取得を進めているとのことであった。本報告書では、企業によるワイン用原料生産基地の事例を紹介したが、その他の企業一般による農業参入が、次第に現れている農業のリタイア層から発する農地流動化を背景として、今後増大してくるものと考えられる。ブドウに限らず、中国における果樹農業全般に関わる今後の動向として、注視する必要があるものと考えられる。

参考文献一覧

- [1] 大島一二編著『中国野菜と日本の食卓』芦書房、2007年
- [2] 晁无疾「建国60年中国葡萄産業発展歷程与展望」『中外葡萄与葡萄酒』2009年9月、pp.56-60
- [3] 馬愛紅・郭紫娟・李海山・趙勝建・劉長江・袁軍偉・馬曉「我国葡萄産業発展概況」『河北農業科学』第13巻第12期、2009年、pp.6-9
- [4] 田淑芬「中国葡萄産業態勢分析」『中国葡萄与葡萄酒』2009年1月、pp.64-66
- [5] 孫海生主編『図説葡萄高効栽培關鍵技術』金盾出版社、2009年
- [6] 趙勝建編著『葡萄精細管理12ヶ月』中国農業出版社、2009年
- [7] 劉捍中・劉鳳之主編『葡萄無公害効栽培』金盾出版社、2004年
- [8] 国家統計局貿易外経統計司『中国商品交易市場統計年鑑』中国統計出版社、2010年
- [9] 成田拓末「中国の果樹政策と農民專業合作社～農民による協同組合の萌芽～」『果実日本』第65巻第2号、2010年、pp.26-31

< 参考資料 >

葡萄购买情况调查表

问题一、关于购买国产葡萄的情况

①是否经常购买葡萄? 经常 不经常 不购买

经常: 每周2~3次、每周1次、每月2~3次、每月1次、半年2~3次、半年1次、每年1次

②平时购买葡萄的场所: 超市、百货公司、水果专卖店、农贸市场、批发市场、其他 _____

③平时购买的葡萄价格: _____ 元/斤

④平时购买的葡萄的产地(可多选): 外国、新疆、河北、山东、辽宁、河南、浙江、江苏、陕西、四川、安徽、中国其他地区、不知道

⑤您所知道的葡萄品种有哪些? 巨峰、红地球、红提子、青提子、户太8号、维多、京亚、维多利亚、夏黑、其他 _____

⑥请您选择平时购买的葡萄特征(可多选): 色(赤、青、黑)、核(有、无)、皮(厚、薄)、味(甜、酸)、粒(大、小)

⑦每次购买的葡萄量: 约1斤(=500g=约1串)、约2斤(=1kg=约2串)、其他 _____

⑧在您购买进口葡萄时,最重视哪些方面?
(根据重视程度请按照1、2、3...填写)

味道	很满意·满意·一般·不满意·很不满意	安全性	很满意·满意·一般·不满意·很不满意
颜色	很满意·满意·一般·不满意·很不满意	价格	很贵·贵·妥当·便宜·很便宜
粒大小	很满意·满意·一般·不满意·很不满意	包装	很满意·满意·一般·不满意·很不满意
新鲜度	很满意·满意·一般·不满意·很不满意		

⑨对国产葡萄的评价

味道	很满意·满意·一般·不满意·很不满意	安全性	很满意·满意·一般·不满意·很不满意
颜色	很满意·满意·一般·不满意·很不满意	价格	很贵·贵·妥当·便宜·很便宜
粒大小	很满意·满意·一般·不满意·很不满意	包装	很满意·满意·一般·不满意·很不满意
新鲜度	很满意·满意·一般·不满意·很不满意		

问题二、关于购买进口葡萄的情况

①过去一年里购买过几次进口葡萄? 经常 不经常 不购买

经常: _____ 次

②在什么时候您购买进口葡萄(可多选): 平时、春节、元宵节、国庆节、端午节、儿童节、中秋节、圣诞节、其他 _____

③购买进口葡萄的目的(可多选): 自家消费、送礼、来客接待、其他 _____

④购买进口葡萄的场所(可多选): 超市、百货公司、蔬菜市场、水果专卖店、其他 _____

⑤购买进口葡萄的单价: _____ 元/斤

⑥所购进口葡萄的原产国(可多选): 智利、美国、秘鲁、南非、其他 _____、不知道

⑦您所知道的进口葡萄品种有哪些? 红提子、青提子、黑加伦、其他 _____

⑧请您选择平时购买的葡萄特征(可多选): 色(赤、青、黑)、核(有、无)、皮(厚、薄)、味(甜、酸)、粒(大、小)

⑨在您购买进口葡萄时,最重视哪些方面?
(根据重视程度请按照1、2、3...填写)

味道	很满意·满意·一般·不满意·很不满意	安全性	很满意·满意·一般·不满意·很不满意
颜色	很满意·满意·一般·不满意·很不满意	价格	很贵·贵·妥当·便宜·很便宜
粒大小	很满意·满意·一般·不满意·很不满意	包装	很满意·满意·一般·不满意·很不满意
新鲜度	很满意·满意·一般·不满意·很不满意		

⑩您对进口葡萄的评价

味道	很满意·满意·一般·不满意·很不满意	安全性	很满意·满意·一般·不满意·很不满意
颜色	很满意·满意·一般·不满意·很不满意	价格	很贵·贵·妥当·便宜·很便宜
粒大小	很满意·满意·一般·不满意·很不满意	包装	很满意·满意·一般·不满意·很不满意
新鲜度	很满意·满意·一般·不满意·很不满意		

问题三、您对进口葡萄的看法

①您认为进口葡萄的价格: 很贵·贵·妥当·便宜·很便宜

②您能接受的进口葡萄价格是: _____ 元/斤

③您能接受从日本进口葡萄价格是: _____ 元/斤

④在什么情况下您有可能购买进口葡萄: 过节、自家消费、送礼、来客接待、其他 _____

⑤您对进口葡萄的评价

味道	很满意·满意·一般·不满意·很不满意·没吃过	新鲜度	很满意·满意·一般·不满意·很不满意·没吃过
颜色	很满意·满意·一般·不满意·很不满意·没吃过	安全性	很满意·满意·一般·不满意·很不满意·没吃过
粒大小	很满意·满意·一般·不满意·很不满意·没吃过	包装	很满意·满意·一般·不满意·很不满意·没吃过

问题四、您的家庭情况

区分	性别	年龄	职业	收入(元/年)	区分	性别	年龄	职业	收入(元/年)
①本人	男·女				④其他	子女·父母亲·其他	男·女		
②配偶	男·女				⑤其他	子女·父母亲·其他	男·女		
③其他	子女·父母亲·其他				⑥其他	子女·父母亲·其他	男·女		

谢谢合作!

海外果樹農業情報 刊行物一覧

No.	調査報告書名	発行年月
69	海外果樹関係データ集	02. 7
70	韓国における落葉果樹の生産・流通事情調査報告書	02. 9
71	ブラジルにおけるリンゴの生産及び流通事情調査報告書	03. 1
72	米国における果実の消費拡大に向けた取り組み状況調査報告書	03. 2
73	ブラジルにおけるマンゴーの生産・流通事情調査報告書	03. 4
74	フィリピンにおける熱帯果実の生産・流通事情調査報告書	03. 7
75	台湾における果樹産業事情調査報告書	03. 8
76	中国福建省におけるカンキツ類の生産・流通事情調査報告書	03. 11
77	海外果樹関係データ集 2003年版	03. 12
78	ポーランド共和国におけるリンゴ及びリンゴ果汁の生産・流通事情調査報告書	04. 3
79	西欧のくだもの消費事情調査報告書	04. 6
80	中国山東省におけるアウトウの生産・流通事情調査報告書	04. 7
81	米国における果実消費動向及び生食用果実流通実態調査報告書	04. 8
82	欧米のくだもの消費事情調査報告書	04. 9
83	オーストラリアにおけるリンゴ及びアウトウの生産・流通事情調査報告書	05. 3
84	中国におけるリンゴの生産・流通事情調査報告書	05. 6
85	タイにおける果実の流通・販売の実態に関する調査報告書	05. 6
86	日米におけるフードガイドの新たな動きについて(くだもの編)	05. 7
87	インドネシアにおける熱帯果実の生産・流通事情調査報告書	06. 1
88	海外の果実生産・貿易状況 2006年版	06. 4
89	台湾における果実の生産・流通・消費事情等に関する調査報告書	06. 6
90	スペインにおけるカンキツ類の生産・流通事情調査報告書	06. 10
91	ベトナム・韓国・インドネシア・台湾における果実の生産・流通事情調査報告書(補遺版)	06. 10
92	チリにおける落葉果実等の生産・流通事情調査報告書	07. 2
93	台湾における果実の輸入関連制度に係る調査報告書(付 果実の生産・流通状況)	07. 5
94	アラブ首長国連邦・インド・タイにおける果実の生産・流通・消費事情調査報告書	07. 7
95	ニュージーランドにおける果実の生産・流通・消費事情等調査報告書	08. 3
96	台湾における日本産果実の流通・消費実態調査報告書	08. 6
97	韓国における主要果実の生産及び輸出入等に関する実態調査報告書	08. 7
98	ドイツ・オランダにおける果実・果実加工品の生産・流通状況調査報告書	09. 2
99	台湾における日本産果実の生産・流通・消費実態調査報告書	09. 6
100	世界の主要果実の生産・貿易概況 2009年版	09. 11
101	中国におけるポンカンの生産流通実態調査報告書-福建省および浙江省を中心として-	09. 11
102	米国におけるリンゴの加工品等実態調査報告書	10. 2
103	ロシアにおける日本産果実の販売可能性および同国の果樹農業・政策基礎調査報告書	10. 7
104	米国連邦行政組織による果実消費拡大に向けた取り組みに係る調査報告書	10. 8
105	台湾における日本産果実の流通消費実態調査報告書	10. 8
106	グローバル化下の米国の果汁産業及び新たな生産流通システム実態調査報告書	10. 8
107	インドにおける日本産果実の販売可能性およびインド産ブドウの対日輸出可能性調査報告書	10. 10
108	カナダの果樹農業・政策実態調査報告書	11. 3
109	米国カリフォルニア州におけるアウトウの生産・流通事情調査報告書	11. 6
110	台湾における果実の生産・流通・消費等実態調査報告書	11. 6
111	中東における日本産果実の販売可能性報告書	11. 8
112	ブラジルにおけるオレンジ及びオレンジ果汁を中心とした生産・流通事情調査報告書	11. 9
113	中国の主要都市における日本産果実の販売可能性及び同国のアウトウ産地調査報告書	11. 10
114	世界の主要果実の生産・貿易概況 2012年版	12. 3
115	台湾における日本産果実の流通状況等実態調査報告書	12. 6
116	中国におけるブドウの生産・流通・消費調査報告書	12. 10